

商品語の〈場〉は人間語の世界とどのように異なっているか(4)

——『資本論』冒頭商品論の構造と内容——

井 上 康
崎 山 政 毅

はじめに

- 〈Ⅰ〉人間語の世界に対する限りでの商品語の〈場〉
- 〈Ⅱ〉『資本論』初版と第二版の位相（以上、632号）
- 〈Ⅲ〉人間語による分析世界としての『資本論』第二版第1章第1節および初版・フランス語版当該部分の比較対照による解説
 - (i) 〈富—価値—商品〉というトリアーデ
 - (ii) 『資本論』初版、第二版、およびフランス語版の対照
 - (iii) パラグラフ①および②の検討
 - (iv) パラグラフ③の検討
 - (v) パラグラフ④の検討
 - (vi) パラグラフ⑤の検討
 - (vii) 「共通なもの」= 価値、「第三のもの」= 商品に表わされた抽象的人間労働
 - (viii) 初版のパラグラフ⑥～⑨の検討
 - (ix) 第二版・フランス語版のパラグラフ⑥、⑦の検討
 - (x) 第二版・フランス語版のパラグラフ⑧、⑨の検討
 - (xi) 価値および価値実体の概念の一応の定立（以

上、633号)

- 〈Ⅳ〉商品語の〈場〉——価値形態
 - (i) 商品をつくる労働の特殊歴史的規定性について
 - (ii) 初版本文、初版付録、および第二版のそれぞれの価値形態論
 - (iii) 価値表現において諸商品は何をどんな風に語るか
 - (iv) 〈自然的規定性の抽象化〉過程に関して
 - (v) 〈私的労働の社会化〉過程に関して
 - (vi) 価値の実体と等価形態の謎性
 - (vii) 初版本文価値形態論の形態Ⅱに関して
 - (viii) 初版本文価値形態論の形態Ⅲに関して
 - (ix) 初版本文価値形態論の形態Ⅳに関して（以上、635号）
- 〈Ⅴ〉価値形態論と交換過程論との関係について（本号）
 - (i) 価値形態論に対する交換過程論
 - (ii) なぜ、第二版は初版本文の形態Ⅳを捨て貨幣形態を形態Ⅳとしたのか
- 〈Ⅵ〉〈富—価値—商品〉への根源的批判について
おわりに

(承前)

〈Ⅴ〉価値形態論と交換過程論との関係について

(i) 価値形態論に対する交換過程論

初版本文「第1章 商品と貨幣」の「(一) 商品」から「(二) 諸商品の交換過程」に移るところに次のような一文がある。

商品は、使用価値と交換価値との、したがって二つの対立物の、直接的な統一体である。それゆえ、商品の一つの直接的な矛盾である。この矛盾は、商品がこれまでのように分析的に、あるときは使用価値の観点のもとで、あるときは交換価値の観点のもとで、考察されるのではなくて、一つの全体として現実に他の諸商品に関係させられるやいなや、発展せざるをえない。そして、諸商品の相互の現実の関係は、諸商品の交換過程なのである⁹⁷⁾。(下線は引用者)

この文章は、第二版には存在しない。だがこの短い文章、とりわけわれわれが下線を引いた部分にはっきりと示されているように、初版本価値形態論においては、歴史的現実的諸条件を捨象した上で純論理的に詰められる限りの議論がなされていること、さらにその議論を受けて、交換過程論に入って初めて歴史的現実的諸条件を考慮した議論がなされていることが解る。

純論理的世界から歴史的現実的世界への移行、——これについてマルクスは次のようにより詳細に述べている。

商品の交換が商品価値として互いに関係させ、商品価値として実現するのである。それゆえ、諸商品は、それらが使用価値として実現されるまえに、価値として実現されなければならないのである。／他方では、諸商品は、それらが価値として実現されるまえに、使用価値として実証されなければならない。[…]／どの商品所有者も自分の商品を、ただ、自分の欲望を満足させる使用価値をもっている他の商品と引き換えにのみ、手放したいと思う。そのかぎりでは、交換は彼にとってただ個人的な過程であるにすぎない。他方では、彼は自分の商品価値として実現したいと思う。[…] そのかぎりでは、交換は彼にとって一般的な社会的過程である。しかし、同じ過程が、すべての商品所有者にとって同時にただ個人的でのみあると同時にまたただ一般的社会的でのみある、ということはいえないのである。／[…] どの商品所有者にとっても、他人の商品はどれでも自分の商品の特殊な等価物とみなされ、したがってまた自分の商品はすべての他の商品の一般的な等価物とみなされる。ところが、すべての商品所有者が同じことをするのだから、どの商品も一般的な等価物ではなくて、したがってまた諸商品は、それらが互いに価値として等置され価値の大きさとして比較されるための一般的な相対的価値形態をもってはいない。したがってまた、諸商品は、けっして諸商品として相対するのではなくて、ただ諸生産物または諸使用価値として相対するだけである。／われわれの商品所有者たちは、当惑のあまり、ファウストのように考え込む。太初^{はじめ}に行^{おこない}行為ありき。だから、彼らは、考えるよりまえに、すでに行なっていたのである。[…] ただ社会的行為だけが、ある特定の商品を一^一般的な等価物にすることができるのである。それだから、すべての他の商品の社会的な行為が、ある特定の商品を除^除外して、この商品においてすべての他の商品が自分たちの価値を全面的に表わすのである。このことによって、この商品の現物形態は、社会的に認められた等価形態になる。一般的な等価物であるということは、社会的な過程によって、この除外された商品の独自の社会的機能になる。こうして、この商品は——貨幣になるのである⁹⁸⁾。

人々の無意識的な歴史上の社会的行為、「考えるよりまえに行なわれる」社会的行為、したがって、諸商品の膨大な現実の交換過程としてある諸商品自体の社会的運動が、現実的に貨幣を生成していくのである。

貨幣結晶は、諸商品の交換過程の必然的な産物である。使用価値と交換価値との直接的な統一としての、すなわち、諸有用労働の一つの自然発生的な総体系すなわち分業のただ個別的な一分枝であるにすぎない有用な私的労働の生産物としての、そしてまた抽象的な人間労働の直接的に社会的な物質化としての、商品の内在的な矛盾——この矛盾は、それが商品と貨幣とへの商品の二重化という形をとるまでは、休みも止まりもしない。それゆえ、諸労働生産物の諸商品への転化が行なわれるのと同じ度合いで、商品の貨幣への転化が行なわれるのである⁹⁹⁾。

純論理的に捉えられた一般的等価物は、自然的諸条件を必要条件としかつそれぞれの社会の社会的歴史的現実的諸条件に基づいて貨幣形態へと転成する。その場合の貨幣形態は「一般的な等価物の完成した姿¹⁰⁰⁾」である。一般的価値形態から貨幣形態への転成のためには、諸々の価値形態相互の「移行」とは異なる現実的諸条件が必要となる。マルクスは、共同体が他の別の共同体あるいはその成員と接触するところで商品交換が発生すると指摘し、商品交換の発展過程—貨幣の生成過程を以下のように歴史的具体的に述べていく。

この形態〔価値形態のこと〕の必然性は、交換過程にはいつてくる商品の数と多様性とが増大するにつれて発展する。課題は、その解決の手段と同時に生まれる。商品所有者たちに彼ら自身の物品をいろいろな他の物品と交換させ、したがってまた比較させる交易は、いろいろな商品がいろいろな商品所有者たちによってそれらの商品の交易のなかで一つの同じ第三の商品種類と交換され価値として比較されることなしには、けっして行なわれないのである。このような第三の商品は、それがいろいろな他の商品にたいする等価物となることによって、直接に、たとえ狭い限界のなかにおいてであるにせよ、一般的または社会的な等価形態を得る。この一般的な等価形態は、それを生み出した一時的な社会的接触とともに発生し消滅する。かわるがわる、そして一時的に、一般的な等価形態はあれやこれやの商品に付着する。しかし、商品交換の発展につれて、それは排他的に特別な商品種類だけに固着する。言い換えれば、貨幣形態に結晶する。それがどんな商品種類に引き続き付着しているかは、さしあたりは偶然的である。とはいえ、だいたいにおいて二つの事情が事柄を決定する。貨幣形態は、事実上域内諸生産物の交換価値の自然発生的な現象形態であるもっとも重要な外来の諸交換物品に付着するか、または域内の譲渡可能な財産の主要な要素をなしている使用対象、たとえば家畜のようなものに付着する。〔…〕／商品交換がその単に局地的な限界を打ち破り、したがってまた商品価値が人間労働一般の物質化にまで広がって行くにつれて、貨幣形態は、生まれながらに一般的な等価物の社会的な機能に適している諸商品のうえに、すなわち貴金属のうえに、移って行くのである¹⁰¹⁾。

このように貨幣形態自身の発展があり、貨幣は次第に銀と金に、そして最終的には金に固定化されていく。この移行が現実には生じた後では、一般的等価物は貨幣として骨化する。かくして全商品世界は、貨幣商品とそれ以外の全商品とへ二重化し分裂し、それが固定化する。貨幣商品が生み出されれば、先に見た等価形態に纏わりついた謎、その神秘的な性質は貨幣に固着する。貨幣は生まれながらに・そのあるがままの姿で、一般的な価値存在であり、一般的な社会的富の存在形態なのである¹⁰²⁾。

商品は価値と使用価値との二重物であると同時に、その直接的統一物であった。だが今ではこの対

立は、一方の貨幣と他方の貨幣ではない他のすべての商品とへの分裂・対立へと発展し、固定化する。貨幣は抽象的人間労働—価値実体の直接の体化物、個体的化身、純粋な価値肉体である。したがって貨幣形態は直接的な一般的社会的形態＝直接的な一般的交換可能性の形態となる。貨幣形態は社会的富の一般的な実在形態である。これに対して貨幣でないすべての商品は、直接に社会的ではない労働（あくまで私的諸労働）の体化物であり、直接的な交換可能性の形態にない諸物である。それらはそれぞれ、諸使用価値形態にある諸物として、価値の一般的化身たる貨幣に対立する。それらはそのままでは——つまり交換関係に入らない限り・最終的には貨幣との交換関係に入らない限り——、それらに表わされた私的労働は社会的労働として認められることはなく、それゆえ価値—商品として認められない。

x 量の商品 A = y 量の商品 B という交換価値の最も単純な表現にあっても、他の一つの物〔Ding〕の価値の大きさがそれで表わされるところ物〔Ding〕は、その等価形態をこの関係にはかかわりなく社会的な自然属性として持っているかのように見える。われわれはこのまじがった外観の固定化を追跡した。この外観は、一般的な等価形態が一つの特別な商品種類の現物形態と合生すれば、または貨幣形態に結晶すれば、すでに完成している。一商品は、他の諸商品が全面的に自分たちの価値をこの一商品で表わすのではじめて貨幣になるとは見えないで、逆に、この一商品が貨幣であるから、他の諸商品が一般的に自分たちの価値をこの一商品で表わすように見える。媒介する運動は、運動そのものの結果では消えてしまって、なんの痕跡も残してはいない。諸商品は、なにもすることなしに、自分たち自身の完成した価値姿態を、自分たちのそとに自分たちと並んで存在する一つの商品体として、眼前に見いだすのである。これらのもの〔diese Dinge〕、金銀は、地の底から出てきたままで、同時にいっさいの人間労働の直接的な化身である。ここに貨幣の魔術がある。人間たちの社会的生産過程における彼らの単なる原子的な行為は、したがってまた彼ら自身の諸生産関係の、彼らの制御や彼らの意識的個人的行為にはかかわりのない、物象的な姿〔sachliche Gestalt〕は、まず第一に、彼らの労働生産物が一般的に商品形態をとるということに現われるのである。それゆえ、貨幣物神の謎は、ただ、商品物神そのものの謎が人目に見えるようになり人目をくらすようになったものでしかないのである¹⁰³⁾。

先に価値形態Ⅲのところ、実体という哲学史上の用語を用いて価値実体の概念をなぜマルクスが措定したのかについて触れておいたが、まさしく貨幣において実体というものが現実世界に立ち現われ、人々の思考と行為を規制・束縛・制御するものとなるのである。マルクスは『聖家族 別名批判的批判の批判 ブルーノ・バウアーとその伴侶を駁す』において、ヘーゲルの実体＝主体概念を批判していた。ヘーゲルの議論は、種々様々な具体的果実とは別に「果実なるもの」が存在し、それが「死んだ、区別のない、静止したものでなく、生きた、みずからのうちにみずからを区別する、動く本質¹⁰⁴⁾」であるまさしく実体＝主体として、具体的な種々の果実において自らを定立するというようなまったく転倒したものである、と。26歳の時、このようにヘーゲルの実体をマルクスは批判したのだが、41歳では〈交換価値の実体〉（『経済学批判』第一分冊（1859年刊））、49歳では『資本論』（初版）において〈価値の実体〉という概念を措定した。なぜなら、哲学者たちの頭の中に生え育った実体というものが、商品生産社会においては、貨幣という形で現実に現われ出ており、人々のい

わば社会的「本能」に基づく社会的行為によって、社会的実体たる価値実体が日々定立されているからであった。

思弁的哲学者の頭の中でだけ生え育った「果実なるもの」のような「実体なるもの」が、商品生産社会においては、社会的実体たる価値実体という純粋に社会的なものとして産み出され、存在するのであり、それは貨幣形態の姿でわれわれの目に実際に捉えられるものになるのである。商品に表わされた労働の二重性は、発展して、貨幣と、貨幣ではないその他すべての商品とへの商品世界の二重化にいたる。貨幣は〈抽象的人間労働 - 価値〉の個体的化身となり、貨幣以外の全商品はそのままでは、つまり交換関係のうちに入らなければ、貨幣との等置関係に入らなければ、単に〈具体的有用労働—使用価値〉を表わすことになる。思弁的哲学者の頭の中で生え育った実体よりもはるかに実体らしい実体、その力を現実にもった実体として貨幣は現われ出ている。思惟の中での転倒ではない、現実の社会における完全な転倒が貨幣に表出しているのである。マルクスはまさしく〈実体〉という用語を使うことによって〈商品 - 価値 - 価値実体〉への根源的批判を遂行しようとしたのである。

ところで、貨幣形態には歴史的現実的な諸条件が必要であるとすれば、そこで語られる商品語は価値形態論でのそれとはその点で異なったものであるだろう。だがこの点について本稿で詳しく追究することはできない。ただ次のことだけ述べておく。

商品は〈体〉を〈忘れてしまう〉、と先に述べた。この点からすると、貨幣が特有の使用価値 = 金に固着・固定化することは、〈体〉を〈忘れてしまう〉という状態からの逆転であるかに思われる。こうして商品語も特有の肉体性を帯びるかに思われる。だが実は、貨幣が唯一つ金を自らの固有の〈体〉とすることによって、〈体〉を〈忘れてしまう〉度合いはある点ではむしろ飛躍するのである。というのはこうである。一般的等価物は「一般的な価値肉体、抽象的な人間労働の一般的な物質化¹⁰⁵⁾」であり、他のすべての商品との直接的交換可能性の形態、一般的社会的形態にある。それは富の一般的形態であり、人間の社会性を一身に体现するものである。だから一定の社会において一般的等価物として骨化した貨幣は、このような形態にある唯一つのものであって当該社会に君臨し、他の一切の商品に対して頭で立つ¹⁰⁶⁾、つまり、抽象性の極限にまで抽象化された純粋に社会的なものとして肉体性を剥がれいわば単に頭だけになったものとして一社会に君臨するからである。その身体は単に〈王の身体〉でしかない。

先ず、流通手段としては、金はむしろまったく後景に退き観念化が著しく進展する。木片や紙などの種々の代替物や単なる帳簿上の記載や今日の電子マネー（ビットコインが端的な例である）のようなありとあらゆる簡便な代替物が立ち現われ、〈体〉の必要性が限りなく逡減する。他方、支払・決済手段としては、価値の現実の移転が必要であり、貨幣金肉体が要求される（この肉体性も今日社会について考えれば解るように、一定の抽象化と観念化を可能とする。これは高度に発展した信用制度・機構を必要条件とするが、これについてはここでは触れない¹⁰⁷⁾）。だがここでは、支払は可能な限り相殺され最終的に残った支払だけが決済としてなされる。純粋な価値移転だけが行なわれる。それはもはや特定の商品を手とした関係のうちにあるのではなく、歴大な支払関係の総括であり、そこでの富一般 = 普遍的な富の存在形態たる貨幣の言葉はもはや対話的な言葉ではなく、商品世界の絶対的な王としての一方的な詔であろう。饒舌を含みこんだ沈黙は眩きにも似た詔になる。「価値として朕は〈渡御〉をおこなう」と。

以上見てきたように、価値形態論と交換過程論とはまったく論理的位相が異なっている。初版本

文価値形態論と交換過程論とを接続させることによってこそ、そのことがはっきりと理解されるのであり、初版附録価値形態論あるいは第二版価値形態論と交換過程論とを接続させることによって、この位相差が不分明になるのであり、論理上の無理が生じることになるのである¹⁰⁸⁾。

(ii) なぜ、第二版は初本文の形態Ⅳを捨て貨幣形態を形態Ⅳとしたのか

前節でわれわれは、初本文の価値形態論に初版の交換過程論が論理的に無理なく見事に接続していることを確認した。だが第二版では、価値形態論に貨幣形態を入れ、しかも交換過程論の書き換えを本質的にはやっていないために、両者の接続に論理的無理が生じていた。こうした難点が生じるにもかかわらず、なぜ、第二版では初版付録の形を踏襲し、価値形態論において形態Ⅳを貨幣形態としたのであろうか。これをきちんと見極めるためには、まず初版付録の意義とそれについてのマルクスの処理について詳しく見ておく必要がある。

初版付録を付すことになった経緯については先に引用した第二版の後記に記されていた。『資本論』初版の校正作業をするために、ハノーファーのクーゲルマン宅に滞在することになったマルクスをクーゲルマンが説得したというのである。「彼〔クーゲルマン〕は、大多数の読者にとっては価値形態の補足的な、もっと教師的な説明が必要だということを、私に納得させたのである」とマルクスは記している。これと並行してエンゲルスとの間でのやりとりがあった。クーゲルマンからの要請を受けたからであろう、マルクスはエンゲルスに、1867年6月3日付の手紙で「価値形態の説明のなかのどんな点を、とくに俗人のために付録のなかで一般向きにすればよいか」、「君の意見も精確にしらせてほしい」と述べていたが¹⁰⁹⁾、これに対してエンゲルスは、次のように回答した。決定的な意見であったと思われる。同年6月16日付のマルクス宛の手紙である。

第二ボーゲンはことにヨウ、Karbunkel癱に悩まされた痕跡を帯びている。だが、もはや改める必要はない。また、付録でこれ以上それについて書くこともないと思う。というのは、俗人たちはなんといってもこの種の抽象的な思考には慣れていないのだし、おそらく価値形態のために苦勞してはくれないだろうからだ。せいぜい、ここで弁証法的に得られた結果がもう少し詳しく歴史的に論証され、いわば歴史によってそれが検証されるだけでよいだろう。といっても、そのためにもっとも必要なことはすでに述べられてもいるのだが。しかし、君はこれについてはたくさん材料をもっているのだから、おそらくそれについても一つまったく適切な余論を書くことができるだろう。つまり、それによって、俗人のために歴史的な方法で貨幣形成の必然性やそのさいに現われる過程を示すわけだ。／君のやった大きな失策は、これらの比較的抽象的な諸展開の思考過程をもっと細かい区分や別々の見出しで見やすくしなかった、ということだ。君はこの部分を、ヘーゲルのエンツィクロペディのようなやり方で短い段落で取り扱ったり、それぞれの弁証法的な移行を別々の見出しで目だたせたり、できれば余論や単なる例解はすべて特別な字体で印刷したりすればよかつたろう。そうすれば、この本はいくらか学校教師風に見えたかもしれないが、非常に大きな部類の読者にとって理解が根本的に容易にされたことだろう。民衆は、学識者でさえも、ちょうどこのような考え方にはもはやまったく慣れていないので、彼らにはできるだけわかりやすくしてやらなければならないのだ¹¹⁰⁾。(下線は引用者)

下線を付したところが問題である。価値形態論を歴史的過程の叙述として整理すべきであると述

べているからである。歴史的過程としての叙述は必ずしも〈平易化〉と一致するものではない。〈平易化〉は「ヘーゲルのエンツィクロペディのようなやり方」とはたしかに完全に一致するだろう。しかし、歴史的過程としての叙述と〈平易化〉とはそもそも別の事柄である。われわれが考えるに、おそらくエンゲルスは価値形態論の形態Ⅰ～Ⅳを歴史過程的に理解していたのだと思われる。だからこそ、歴史過程的に叙述されていない初版本文の価値形態論に「^{ヨウ、Karbunkel}癰に悩まされた痕跡」をみてとったのではないだろうか。

エンゲルスのこの歴史過程的な価値形態論への理解は、多分に『資本論』の前書と言うべき『経済学批判』第一分冊(1859年)の叙述とエンゲルス自身のそれへの評価に基づいていると考えられる。というのも、同書では交換過程論の章が商品の章から区分されておらず、「第一章 商品」で交換過程論も商品論と渾然一体に論じられており、歴史的な事柄が補説としての「A. 商品分析のための史的考察」において、特別に取りあげられているからである。しかもエンゲルス自身の傾向性があるのであろうが、いま引用した同じ手紙の中で、初版本文の叙述より『経済学批判』での叙述の方が好ましい、と述べているからである¹¹¹⁾。

ここであらためて初版付録を付すことになる経緯で押さえておくべき点を整理すれば、①クーゲルマンは本文の価値形態論の易しい解説となるべき付録を作成すべきだとしたこと、エンゲルスはそれを受けて、②内容として、価値形態の議論を歴史的な過程・歴史的発展の過程として描き出す(「歴史的な方法で貨幣形成の必然性 […]」を示す)ように要請していること、③形式として、ヘーゲルの『エンツィクロペディ』にならったものとすべきである、という点である。この中でもっとも重要な論点となるのは、先に述べたように②である。つまり問題なのは、価値形態論における形態ⅠからⅣは歴史的な発展の過程として叙述されるべきものなのかという点である。

では、クーゲルマンの要請やエンゲルスの評価とそれに基づく忠告に、マルクスはどのように対応したか。同年6月22日のエンゲルスへの返書でマルクスは、「価値形態の展開について言えば、君の忠告に従ったり従わなかったりした。この点でもまた弁証法的にふるまうためにだ¹¹²⁾」と書いた。この「弁証法的にふるまう」とは一体どういうことだったのか。

まず〈平易化〉を目的とした叙述形式という点では、ほぼ完全にエンゲルスの忠告と要請にしたがったとあってよい。6月27日付のエンゲルス宛の手紙でマルクスは、「付録の取扱いではどんなによく君の忠告を守ったかを見てもらうために、この付録の区分や項目や表題などをここに書き写しておこう¹¹³⁾」として、付録の目次一覧を掲げている。言葉遣いの点でわずかな異同があるものの、ほぼ完全に実際の付録と一致している。エンゲルスが述べた「エンツィクロペディのようなやり方」である。だが内容上の点では、きわめて微妙ではあるが、エンゲルスの要請に完全にしたがったとは言えないものとなっている。すなわち、歴史過程的な叙述という点に「躊躇」があるように見える。詳しく見ていこう。

- ① 各形態から次の形態に移る際に「x 形態から y 形態への移行」という小項目が必ず立てられている。
- ② 最後の形態である形態Ⅳが貨幣形態である。
- ③ しかも貨幣として金が措かれている。

このように付録の特徴を示せば、内容上もエンゲルスの要請に忠実にしたがったように見える。すなわち、金はその形態をとっている貨幣形態へと向かって歴史的に発展していく過程を解くものとしての価値形態論、「貨幣形成の必然性」を歴史的に解く価値形態論である。この点で②、③は決定

的である。マルクスがエンゲルスの要請に内容上もかなりの程度までしたがったことは事実である。だがしかし、より細部に目を向けると、マルクスのある種の「躊躇」が見えてくる。まず、上記の①であるが、これらは当然ながら移行を解いているのだが、必ずしも歴史的発展過程としての移行を解いているのではない。とりわけ形態ⅠからⅡへの移行については、リンネルの単純な相対的価値表現（つまり形態Ⅰ）の算術和として形態Ⅱが導かれているだけである。そうした叙述が移行であると言われてもいささか困惑するものであり、ましてや歴史過程的な発展の叙述とは言えない。これに対して第二版では、形態Ⅰの「欠陥」が述べられた上で、それを否定的契機とした移行が解かれている。まず、次のように欠陥が指摘される。

単純な価値形態、すなわち一連の諸変態を経てはじめて価格形態にまで成熟するこの萌芽形態の不十分さは、一見して明らかである¹¹⁴⁾。

貨幣形態、さらには価格形態に向かって前進していく過程として、形態ⅠからⅡへの移行があるとされているわけである。しかも第二版ではこの「欠陥」を踏まえて、「単一の価値形態はおのずからもっと完全な形態に移行する¹¹⁵⁾」とされ、単純な価値形態の算術的総和ではなく、単純な価値形態の「どこまでも引き伸ばされる系列¹¹⁶⁾」という過程的なものとして導かれる。発展という観点からはっきりと見て取れるわけである¹¹⁷⁾。

この「欠陥」ということと言えば、付録においても形態ⅡからⅢへの移行に関して「(4) 展開された、または全体的な価値形態の欠陥」という項目が措かれ、「(5) 全体的な価値形態から一般的な価値形態への移行」とつながっていく。だが、形態ⅠからⅡへの移行が上記のようなものであり、すぐ後で詳しく述べるが、形態ⅢからⅣへは本質的な変化はないとされているため、この「欠陥」なるものは形態Ⅱのみに固有なものとして理解するしかない。

これに対して第二版では、付録の上記の二項目（「(4) 展開された、または全体的な価値形態の欠陥」と「(5) 全体的な価値形態から一般的な価値形態への移行」）が「(3) 全体的な、または展開された価値形態の欠陥」としてまとめられ、ほぼ同じ文章が綴られる。だから第二版では形態ⅠからⅢへの移行が一貫したものとなっているわけである。

さらに、付録には形態Ⅰの第7番目の項目として「商品形態と貨幣形態との関係」という注目すべき項目が措かれ、単純な価値形態：「20 エレのリンネル = 1 着の上着」と貨幣形態：「20 エレのリンネル = 2 ポンド・スターリング」とが比較され、その相似性・同一性が示されて、「貨幣形態は商品の単純な価値形態のいっそう発展した姿、したがって労働生産物の単純な商品形態のいっそう発展した姿にまったくほかならない、ということは一見して明らかである」と述べられ、「貨幣形態は明らかに単純な商品形態から源を発しているのである」と規定される¹¹⁸⁾。第二版と対照的に、貨幣形態さらには価格形態へと向かう形態Ⅰではなく、逆に、貨幣形態を形態Ⅰへと手練り寄せているのである。価値形態論の本来の目的、「すべての商品の貨幣存在」を解くという究明すべき課題が明確に出ているのである。しかしこの項目(7)は第二版では採用されていない。

貨幣形態を価値形態論で解くことへの「躊躇」は、よりはっきりと次のマルクスのコメントに示されている。先の6月27日付の手紙にある「付録目次一覧」において貨幣形態に関して付されたコメントである。

この貨幣形態についてはただ関連上書くだけで、おそらく半ページにもならない¹¹⁹⁾。

「ただ関連上書くだけ」ということが一体どういうことを意味しているのかが問題となるが、この言明からすれば、価値形態論で「貨幣形態」は敢えて書く必要はない、との含意を読み取ることができる。このコメントに依るのであろう、マルクスは、「Ⅳ 貨幣形態」の冒頭の項目を「(一) 一般的な価値形態から貨幣形態への移行とそれ以前の諸発展移行との相違」と題して次のように書いた。

形態Ⅰから形態Ⅱへの、形態Ⅱから形態Ⅲへの移行にさいしては、本質的な諸変化が生ずる。これに反して、形態Ⅳは、いまではリンネルにかわって金が一般的な等価形態をもっているということのほかには、形態Ⅲと少しも区別されるところはない¹²⁰⁾。

形態Ⅰから形態Ⅱ、形態Ⅱから形態Ⅲへは本質的な変化があるが、形態Ⅲから形態Ⅳへは本質的な変化はないと、形態Ⅳの論理的な位置付けをマルクスは行なっている。すなわち、移行はあるが論理上の発展はないということが示されている。この叙述の文脈から考えると、先の貨幣形態にかかわるコメントでの「関連上」という表現は、移行との「関連上」ということであろう。このあたりに貨幣形態を価値形態論で扱うことの精妙な論理的配慮が見て取れる。

またコメントにある「半ページにもならない」という点で言えば、初版のファクシミリ復刻版によれば付録全体で約20ページ中、貨幣形態は1ページ半(約7%)でしかなく、もっとも重要な形態Ⅰの約12.6ページ(約64%)と扱いの差は歴然としている。

こう見てくると、やはりマルクスは、価値形態論に貨幣形態を入れることの問題性について意識していたということがわかる。「弁証法的にふるまうために」「君の忠告に従ったり従わなかったりした」とマルクスが述べたことが、いま詳細に検討したところに出ているということであろう。

だがにもかかわらず、貨幣形態を付録では取り入れたのだ。もちろん、価値形態の完成した姿として貨幣が厳然として存在しているという現実が、より解り易い叙述という要請と結び付いたということがあろう。だが、貨幣形態を価値形態論に取り入れたことは決定的なことであった。しかも金においてそれを解いたのであるから余計にそうであった。貨幣について語るためには、歴史的現実的な諸々の事柄について語る必要がある。しかし、それは交換過程論の課題である。にもかかわらず、それに歴史的過程に関することとして触れる以上、その過程を中途半端なところで打ち切りにするわけにはいかない。貨幣形態の完成形態である金にまで話が及ばざるを得ない。にもかかわらずマルクスには「躊躇」があった。叙述が〈平易化〉を目的とするものでありながらぎくしゃくしたものにならざるをえない。再びだが、それはあくまで付録である。本文ではないのだ。〈平易化〉のための付録ということであった。

それゆえここであらためて、マルクスの〈平易化〉に対する対応について考えておく必要がある。先の1867年6月22日のエンゲルス宛の手紙で〈平易化〉の必要性を認めて、「ここで相手にするのは、単に俗人だけではなく、知識欲に燃えた若者などでもある¹²¹⁾」として次のように述べた。

そのうえ、この問題はこの本全体にとってあまりにも決定的だ。経済学者諸氏はこれまで次のようなきわめて簡単なことを見落としてきた。すなわち、20 エレのリンネル = 1 枚の上着、という形態は、ただ、20 エレのリンネル = 2 ポンド・スターリングという形態の未発展の基礎で

しかないということ、したがって、商品の価値をまだ他のすべての商品にたいする関係としては表わしてはいないでただその商品自身の現物形態とは違うものとして表わしているだけの、もっとも簡単な商品形態が、貨幣形態の全秘密を含んでおり、したがってまた、労働生産物のすべてのブルジョア的な形態の全秘密を縮約して含んでいる、ということがそれだ¹²²⁾。

マルクス本人が難解だと初版序文で述べた価値形態論の、その核心すなわち、「単純であるがゆえに、分析するのが困難」だとした形態Ⅰを、先進的な労働者や活動家、また「知識欲に燃えた若者」などになんとか理解して欲しいと、マルクスは語っているのだ。だからこそ、この手紙で触れた内容を、初版付録では形態Ⅰのまとめに当たる「(7) 商品形態と貨幣形態との関係」(この項目については先に触れた)でいわば「結論の先取り」のような形で述べたのである。この項目によって価値形態論の難解さが緩和され(あるいはなくなり)、平易になったかどうかはまた別の問題ではあるが、とにかく価値形態に関する部分はどうしても先進的な労働者・活動家などには理解して欲しかったということだ。

このために〈平易化〉はマルクスには絶対に必要だった。本文に対する付録という形式はその目的にとって適切な形式であったろう。本文は本文としてあくまで存在するわけであるのだから。「『弁証法的でない』読者に対して、x-y ページをとばしてそのかわりに付録を読むように¹²³⁾」と序文に書くつもりであると、同じ手紙の中でマルクスは言っている。エンゲルスが言う『エンツィクロペディ』式の叙述は〈平易化〉を図る付録にはうってつけであったに違いない。その叙述は弁証法を損ない形式論的な叙述の道を敷くことになるであろうが、しかし本文は(いかに難解であろうとも)弁証法を徹底して踏まえながら別個に存在しているのだ。叙述をどのようなものとするのかという判断は、『エンツィクロペディ』的な形式を歴史的発展の論理でうめるのかどうかという点に存したであろう。歴史的発展の形相のもとで叙述する必然性はなかったはずだからである。だが、この点でマルクスは「躊躇」しつつも基本的にはエンゲルスに譲歩した。あくまで付録であるという事情と判断とが、この譲歩のもとにあるのではないか。

ではなぜ第二版に初版付録を踏襲して貨幣形態を入れたのだろうか。しかも第二版のそれは付録ではなく本文である。価値形態論と交換過程論とを結ぶ、精確な弁証法の論理的接続が損なわれるという現実が確定してしまうにもかかわらず、なぜそうしたのだろうか。おそらく、マルクスを取り巻く状況の変化とそれへの対応に何らかの〈変化〉をもたらすものがあったということであろうが、しかし、確たる証拠抜きにあれこれと想像だけで言うことはできない。確かめられうる現実にそくして見ておこう。

第二版ではあきらかに、初版付録に見られるある種の「躊躇」が喪失しており、むしろ積極的に貨幣形態を価値形態論に取り入れており、しかも価値形態論全体を形態ⅠからⅣとしての貨幣形態に至る歴史的発展の過程として描き出している。付録との対比で既に見たものにそのことが現われているが、決定的であるのは次の一節だ。第二版価値形態論の冒頭三つ目のパラグラフである。

誰でも、たとえ他のことは何も知らなくてもよく知っているように、諸商品は、それらの使用価値の雑多な現物形態とは著しい対照をなしている一つの共通な価値形態——貨幣形態をもっている。しかし、いまここでなされなければならないことは、ブルジョア経済学がかつて試みようとしなかったこと、すなわち、貨幣形態の発生を示すことであり、それゆえ、諸商品

の価値関係に含まれている価値表現の発展を、そのもっとも単純でもっとも目立たない姿態から光まばゆい貨幣形態にいたるまで追跡することである。これによって同時に、貨幣の謎も消え去ることになる¹²⁴⁾。

この一節は、価値形態論がその完成形態である貨幣形態へと発展していく論理的・歴史的移行・発展を述べるものであるということ宣言するものである。ここで述べられたことからすると、初版本文の価値形態論と第二版のそれとはそもそも目的が異なるということになる。初版本文の価値形態論は、労働生産物はどのようにして現実的に商品になるのかを解くこと、それゆえ「すべての商品の貨幣存在」を解くこと、それを商品語の〈場〉に真向かい、諸商品の〈ことば〉を聴き取り、それを人間語に翻訳・註釈する形で遂行すること、であった。われわれはこれをこそ価値形態論の本来の目的であると考えているが、第二版の価値形態論の目的は、上の一節によるかぎり、「貨幣形態の発生を示すこと〔…〕価値表現の発展を、そのもっとも単純でもっとも目立たない姿態から光まばゆい貨幣形態にいたるまで追跡すること」となる。つまりエンゲルスがマルクスに要請した「歴史的な方法で貨幣形成の必然性やそのさいに現われる過程を示す」ことである。こうである以上、価値形態論全体が歴史過程の、その発展過程の叙述にならざるを得ないことはあきらかである¹²⁵⁾。

かくして、形態ⅠからⅡ、また形態ⅡからⅢへはそれぞれある「内在的欠陥」を克服する移行・発展となる。そして形態ⅢからⅣへの移行については、形態Ⅳの冒頭で、先に引用した付録の文章とまったく同一の文章で、形態ⅢからⅣへは本質的な変化はないと述べることとなるにもかかわらず、それは初版付録における意味とは異なり、より一層歴史的叙述の枠組みに組み込まれたものとしてしかありえないものとなってしまう。そして、形態Ⅳの貨幣形態はもはや「関連上書くだけ」のものではなく、価値形態論が到達すべき究極目標としての位置を与えられることになった。次の文章は¹²⁶⁾、初版付録の貨幣形態のところであり、そのまま第二版に引き継がれたものだが、これは、歴史的に種々の貨幣が金へと集約されていく過程に関して述べられたものである。

Gold tritt den andren Waaren nur als Geld gegenüber, weil es ihnen bereits zuvor als Waare gegenüberstand. Gleich allen andren Waaren funktionirte es auch als Aequivalent, sei es als einzelnes Aequivalent in vereinzeltten Austauschakten, sei es als besondres Aequivalent neben andren Waarenäquivalenten. Nach und nach funktionirte es in engeren oder weiteren Kreisen als allgemeines Aequivalent.

金が他の諸商品に貨幣として相対するのは、金が他の諸商品に対してすでに以前から商品として相対していたからにはほかならない。他のすべての商品と等しく、金もまた、個別的な交換行為における個々の等価物としてであれ、他のいろいろな商品等価物とならぶ特殊的等価物としてであれ、等価物として機能した。しだいに、金は、より狭い範囲かより広い範囲かの違いはあっても、一般的等価物として機能するようになった。

これは初版付録に書かれているものと同一の文章ではあるが、第二版では直前に引用した価値形態論冒頭の一節（この文章は初版付録にはない）と対応することによって、貨幣形態の歴史的発展過程を叙述するというをより一層鮮明にしている。かくして第二版にあっては、初版本文の論理性とはまったく異なる歴史・論理的な位相をもつ価値形態論が生み出されたのである。

このような価値形態論の改変に対応して、いわゆる商品の物神性のところで、次の重大な書き換えが行なわれた¹²⁷⁾。

初版本文：Was nun endlich die *Werthform* betrifft, so ist es ja grade diese Form, welche die gesellschaftlichen Beziehungen der Privatarbeiter und daher die gesellschaftlichen Bestimmtheiten der Privatarbeiten *sachlich verschleiert*, statt sie zu offenbaren.

そこで、最後に価値形態について言えば、この形態こそは、まさに、私的労働者たちの社会的な諸連関を、したがってまた私的諸労働の社会的な被規定性を、顕示するのではなくて、それらを物象的におい隠すのである。

第二版：Es ist aber eben diese fertige Form – die Geldform – der Waarenwelt, welche den gesellschaftlichen Charakter der Privatarbeiten und daher die gesellschaftlichen Verhältnisse der Privatarbeiter, *sachlich verschleiert*, statt sie zu offenbaren.

ところが、まさに商品世界のこの完成形態－貨幣形態－こそは、私的諸労働の社会的性格、したがってまた私的諸労働者の社会的諸関係をあらわに示さないで、かえってそれを物象的におい隠すのである。

初版での「価値形態」が第二版では「貨幣形態」に変えられている。これはきわめて本質的なところでの論理の後退であり、平易化ならぬ通俗化の弊を犯すものである。「私的労働者たちの社会的な諸連関を、したがってまた私的諸労働の社会的な被規定性を、顕示するのではなくて、それらを物象的におい隠す」ものは決して単に貨幣形態それ自体ではなくて、それを内的な一形態とする価値形態そのもの、まさしく労働生産物が歴史的社会的にとる形態たる商品形態そのものだからである。

貨幣が不思議な社会的な力をもっているというのは人々の日常的な意識である。しかも人々は、まさしく貨幣であるからこそその力が貨幣に本来そなわっているのだと思っている。これに対してマルクスは、貨幣において完成するこの力が、諸商品の社会的関係、すなわち価値形態においてこそ、等価形態にある商品がもつものであることを解き明かした。この価値形態論の議論の上にマルクスは、交換過程論において貨幣形態を論じ、貨幣が一社会の中で確立されるや、しかも資本主義的生産様式が社会の経済過程を支配するや、結局のところ、〈商品－貨幣〉が社会の経済過程を規定する限り、かの社会的力は貨幣に本来そなわったものとして現実的にも現われるのだということを明らかにした。

この点から言えば、上記の初版から第二版への書き換えは、商品形態－価値形態の秘密を二重に隠蔽することになる——すなわち、第一に価値形態を貨幣形態に切り縮めることによって、しかも第二に、貨幣形態への即自的意識に結び付いてしまうことによって。

この書き換えは価値形態論を貨幣形態へと向かう歴史的発展過程として理解することを決定的に強めることになる。

更に、上に引用した初版、第二版の文章のそれぞれに直接につづく一節を見ると、それらがほぼ同一の文章なので、第二版では書き換えたことによって論理的なつながりが弱く、スムーズではな

いことがわかる。以下のように¹²⁸⁾。

初 版：Wenn ich sage, Rock, Stiefel u.s.w.bezieh'n sich auf Leinwand als allgemeine Materiat'ur abstrakter menschlicher Arbeit, so springt die Verrücktheit dieses Ausdrucks ins Auge.Aber wenn die Produzenten von Rock, Stiefel u.s.w.diese Waaren auf die Leinwand als *allgemeines Aequivalent* bezieh'n, erscheint ihnen die gesellschaftliche Beziehung ihrer Privatarbeiten genau in dieser verrückten *Form*.
もし私が、上着や長靴などが抽象的人間労働の一般的な物質化としてのリンネルに関係するのだ、と言うならば、この表現の奇異なことはすぐに感じとられる。ところが、上着や長靴などの生産者たちがこれらの商品を一般的な等価物としてのリンネルに関係させるならば、彼らにとっては自分たちの私的労働の社会的な関係がまさにこのような奇異な形態をもって現われるのである。

第二版：Wenn ich sage, Rock, Stiefel u.s.w.bezieh'n sich auf Leinwand als die allgemeine Verkörperung abstrakter menschlicher Arbeit, so springt die Verrücktheit dieses Ausdrucks in's Auge. Aber wenn die Producenten von Rock, Stiefel u.s.w.diese Waaren auf Leinwand – oder auf Gold und Silber, was nichts an der Sache ändert – als allgemeines Aequivalent bezieh'n, erscheint ihnen die Beziehung ihrer Privatarbeiten zu der gesellshaftlichen Gesamtarbeit genau in dieser verrückten *Form*.
もし私が、上着や長靴などが抽象的人間労働の一般的な具体化としてのリンネルに関係するのだ、と言うならば、この表現の奇異なことはすぐに感じとられる。ところが、上着や長靴などの生産者たちがこれらの商品を一般的な等価物としてのリンネルに——または金銀に、としても事柄に変わりはない——関係させるならば、彼らにとっては自分たちの私的労働の社会的総労働にたいする関係がまさにこのような奇異な形態をもって現われるのである。

これは商品の物神性論の部分にあるが、一般的価値形態に関する叙述である。初版では本文の価値形態論では貨幣形態について解いていないので、先に引用したところからここへと自然な論理的流れでつながっている。ところが第二版では形態Ⅳとして貨幣形態を解いており、その上でこの議論がなされているので、形態Ⅲの一般的価値形態への議論の後戻りが生じることになっている。しかもその不自然さを埋め合わせるために「一般的等価物としてのリンネル」という言葉の後に「または金銀に、としても事柄に変わりはない」という註釈が挿入されている。だがこの註釈の挿入でかえって不自然さが目立つことになっている。

いま検討している箇所は先に述べたように、物神性論の部分にある。第二版で言えば、第1章第3節である。実は当節は大幅に変更・加筆されており、議論が緻密化され深化させられているのであって、解かり易くなったとは決して言えないが、難解さの度合は初版よりは明らかに減じている。だがにもかかわらず、いま述べてきたような問題が生じてしまっているのである。

結局、初版付録自体が〈平易化〉ということだけでは捉えきれない面をもつものではあったが、初

版から第二版への価値形態論の書き換えについては〈平易化〉はむしろ後景に退き、歴史的な移行と発展の論理に基づく価値形態論、初版本の価値形態論とは内容上異なった価値形態論が生み出されたということである。

だがこれは、いま見たような例でもわかるように、論理的・理論的には後退以外の何物でもない。第二版の方が商品語をより精確に、より深く聴き取り、それゆえ叙述がより論理的に緻密・精確であるところが確かにあるのではあるが（その一端をいわゆる「回り道」の議論において先に見た）、総体としてはやはり論理的な後退が第二版にはあるのである。

〈Ⅶ〉〈富 - 価値 - 商品〉への根源的批判

先に、〈Ⅲ〉の（i）で〈富 - 価値 - 商品〉に対する根源的批判が『資本論』冒頭商品論、ひいては『資本論』全体を貫く主脈であると述べておいたが、冒頭商品論の検討を踏まえてこの批判を総括しておこう。

マルクスは『資本論』冒頭で、「資本主義的生産様式が支配する諸社会の富は膨大な商品集積として現われる」と規定した。富が、この社会では商品集積となってしまっており、またそうである他ないとマルクスは喝破したのだ。類としての人間が歴史上実現し得た社会性の水準が、商品という形態において現われていると押さえたわけである。だからこの冒頭の一句がそもそも商品生産 - 資本主義的生産様式に対する根本的な批判なのである。これを出発点とし冒頭商品論を批判の基底として、商品、すなわち〈商品 - 貨幣 - 資本〉という三つの形態を取り相互転化しつつ運動するこの商品に対する批判を、マルクスは『資本論』全体を通して深め豊富化し鋭くしていく。富は類としての人間の、歴史的にそのつど規定された普遍的力能の発現であり、ある一社会の富の総体のうちにその社会が実現した社会性の水準が表わされるのであり、人間の類としての水準もまたそこに表わされるのである。かくしてマルクスは、富が商品という形態として現われていることを止揚するための諸条件を商品世界の内在的批判を通して、つまり、商品世界の内に分け入り、そこで諸商品自体が語る商品語を聴き取り、それらを翻訳し註釈することを通じて探っていくわけである。かかる批判の基底に〈価値 - 価値実体〉批判が据えられている。

商品は使用価値と価値との統一物であったが、使用価値は単に価値の「素材的担い手」でしかなく、商品は何よりも価値であり、自らの使用価値 = 〈体〉を〈忘れてしまう〉。先に引用したように、諸商品は商品語で「われわれの使用価値は人間の関心をひくかもしれない。使用価値は物〔Ding〕としてのわれわれにそなわっているものではない。だが、物〔dinglich〕としてのわれわれにそなわっているものは、われわれの価値である。われわれ自身の商品物〔Waarendinge〕としての交わりがそのことを証明している」と語るのである。このところをどのように理解 = 批判するのが〈価値 - 価値実体〉批判の核心である。マルクスは『資本論』のための最初の本格的草稿（『経済学批判要綱』と呼ばれている「1857 - 1858年草稿」）で次のように述べていた。

富は一面では物象〔Sache〕であって、人間が主体として相対するもろもろの物象〔Sachen〕、物質的諸生産物〔materiellen Produkten〕のかたちで現実化されている。他面で価値としては、富は、支配を目的とするのではなくて私的享楽等々を目的とする、他人の労働にたいするたん

なる指揮権〔Commando〕である。あらゆる〔社会〕形態において、富は、物象〔Sache〕であれ、物象〔Sache〕によって媒介された関係であれ、個人の外部に、また偶然的に個人と並んで、存在する物的な姿態〔dinglicher Gestalt〕をとって現われる。そこで、いかに偏狭な民族的、宗教的、政治的規定をうけていようとも、人間がつねに生産の目的として現われている古代の考え方は、生産が人間の目的として現われ、富が生産の目的として現われている近代世界に対比すれば、はるかに高尚なものであるように思われるのである。しかし実際には、偏狭なブルジョア的形態が剥ぎ取られれば、富は、普遍的な交換によって作りだされる、諸個人の諸欲求、諸能力、諸享楽、生産諸力、等々の普遍性でなくてなんであろう？ 富は、自然諸力にたいする、すなわち、いわゆる自然がもつ諸力、ならびに、人間自身の自然がもつ諸力にたいする、人間の支配の十全な発展でなくてなんであろう？ 富は、先行の歴史的発展以外にはなにも前提しないで、人間の創造的諸素質を絶対的に産出すること〔Herausarbeiten〕でなくてなんであろう？ そしてこの歴史的発展は、発展のこのような総体性を、すなわち、既存の尺度では測れないような、あらゆる人間的諸力そのものの発展の総体性を、その自己目的にしているのではないのか？ そこでは人間は、自分をなんらかの規定性において再生産するのではなく、自分の総体性を生産するのではないのか？ そこでは人間は、なにか既成のものに留まろうとするのではなく、生成の絶対的運動の渦中にあるのではないのか？ ブルジョアの経済学では——またそれが対応する生産の時代には——、人間の内奥のこうした完全な表出〔Herausarbeitung〕は完全な空疎化として現われ、こうした普遍的对象化は総体的疎外として現われ、そして既定の一面的目的のいっさいを破棄することが、まったく外的な目的のために自己目的を犠牲に供することとして現われている。だからこそ、一方では、幼稚な古代世界がより高いものとして現われるのである¹²⁹⁾。

富は一方では物象 (Sache) であり、他方では価値 (Werth) であると、マルクスは言う。富がこのように二重の規定性において捉えられていることにまず注意が必要である。後者がとりわけ問題なのだが、まず前者、すなわち、富が物象 (Sache) としてあるという点について検討しよう。この規定については理解するのに困難はないかのように思われるかもしれないが、実はそうではない。諸物 (Dinge; material things)、諸使用対象、諸使用価値の集積等々として規定されているわけではないからである。物象をどのように理解するかが問題であり、丁寧に考える必要がある。富は物象であり、「物質的諸生産物〔materiellen Produkten〕のかたちで現実化されている」とマルクスは言う。この規定は「富は物象〔Sache〕であれ、物象〔Sache〕によって媒介された関係であれ、〔…〕物的な姿態〔dinglicher Gestalt〕をとって現われる」という規定と同一の内容をもっている。つまり富は、物的 (dinglich) な形で現われてはいるが、しかし富はそうした物的なものそのものではなく物象なのだ、というのがマルクスの主張である。物象 (Sache) と物 (Ding) とは決して同一ではないからである。物象は単なる物ではなく、社会の生産諸関係、人々の社会的諸関係をその内に集約し宿している。人々の社会的諸関係、生産諸関係が照り込んだものとして、諸物 (Dingen) は諸物象 (Sachen) である。とはいえ、その社会性は、単に人々が織り成す社会的協業や分業の産物であることに現われるような社会性ではない。そうした社会性を基底としてその上に生み出される社会性、一つの社会をそれとして特徴づける、固有の歴史的規定・限定としての社会性である。

例えば江戸時代の米を考えてみよう。それは一定の社会的協業・分業の産物であり、その社会的

協業・分業体制、とりわけ生産に直接かかわる技術的編制等は同じ江戸時代にあっても変化していたのであり、また逆に、江戸時代から明治時代に入っても変わらないものもあったのである。だが、江戸時代の年貢としての米は、江戸時代を通じてその社会を固有に成り立たせる社会性を背負っており、人々はそうしたものとして米を扱い対処していたのであり、それゆえ米は江戸時代にあってももっとも基本的・中心的な物象であり、米を中心として人々の諸活動の結実の総体が諸物象としての富を形づくっていたのである（人々がそのような言葉・概念を一切持ち合わせてはいなかったとしても）。

このように一つの社会の固有の在り様を現わす社会性を宿したのものとして、物象というものである。だから、一つの社会・共同体にとっての富は、その社会・共同体が生み出す剰余生産物の在り様と密接に関係している。共同体の成員を再生産することがもっぱら生産の目的であるような共同体においても、剰余生産物を中心に、往々にして宗教的な営みと結び付いて、物象としての富の体系が形成されるのである。この富の体系、それは前資本主義的生産の社会にあってはある質的なヒエラルヒーとして現われ、これが価値の質的な序列と照応する。「他人の労働に対するたんなる指揮権 (Commando)」、その最高の「指揮権」は、〈神〉に預けられた「指揮権」、宗教的営みに結び付いて社会的に確定されるものであろう。ところで、この「他人の労働にたいするたんなる指揮権」という価値にたいする規定は理解するのが困難である。質的にヒエラルキー化された物象としての富の体系に照応する価値の質的な序列化された系を考えることは容易である。だが、この「他人の労働にたいするたんなる指揮権」とはいったい何なのか。物象としての富が、ある社会の人々の諸行為・諸活動の結実の総体からみた規定であるのに対して、価値としての富の規定は、そうした個々の人々からみた規定である。だがもちろん、それは富という対象の規定であり、個々人の主観・観念による規定ではない。社会的である限りでの諸個人の社会的な欲求・欲望¹³⁰⁾を基底としながらも、それを乗り越えていく、あくまで対象的な希求・志向性そのものを「他人の労働にたいするたんなる指揮権」とマルクスは言ったのだ。だからこそ、前資本制社会における質的に序列化された価値体系においては、その頂点はいわば〈神〉の志向性であり、かの「指揮権」は〈神〉に托されているのである。だが、こうした前資本制生産社会の〈富 - 価値〉の体系を資本主義的生産様式は打ち破る。「生まれながらの平等派で犬儒派である商品¹³¹⁾」、その集積が富になったということは、物象としての富の質的なヒエラルキー的体系、そしてそれに照応した価値の質的序列体系もまた崩壊したということである。ただし、商品社会においては全商品は、貨幣と貨幣以外の他のすべての一般の商品とに二分されている。富の一般的・個体的化身は貨幣であり、この貨幣と交換される限りで、そのような媒介的形態で、貨幣ではない他のすべての商品は社会的なもの、富の一要素として、それこそまったく平等に認められるのである。そこでは、個々の商品の質を規定する千差万別の諸使用価値は完全に無視される。諸商品が自らの〈体〉を〈忘れてしまう〉ことは不可避なのだ。そして貨幣もまた抽象的普遍としての富の個体的化身であるがゆえに、その〈体〉もまた抽象化され、「他のすべての商品に対して頭でたつ」という、単に〈頭〉だけになったものとなる。こうした抽象化を基底として、貨幣の下でのある意味で質的差異を超越した完全なる平等が実現されるのである。これに照応して価値の従来の個別性が完全に止揚される。従来の〈真・善・美〉のような諸々の価値に纏わりついていた、個人的な観念・主観に価値が規定されるかのような外観はきれいさっぱり投げ捨てられる。価値もまた一般化され、個性・個別性から解き放たれ、価値の社会性がもっとも純粋な・抽象的な形で現われ出ることになったのである。そこでは価値は、質とし

ては究極にまで抽象化されたものとなっており、そもそも量の契機をもたないにもかかわらず、商品に表わされた抽象の人間労働が価値実体となることによって量へと頹落し、ただ量として区別されるだけのものとなる。従来のヒエラルキーは完全に解体し、ただ量的に区別された、それゆえにまったく明瞭・透明な抽象化された価値の体系ができあがる。

商品の価値はそれまでの歴史上のあらゆる価値の集約・総括としてある。それは、それまでの諸価値に纏わりついていた一切の人格的依存関係や共同体の諸関係の刻印を徹底して剥がれ、質の究極にまで抽象化され純粋に社会的なものとなっており、個別性・個性性を完全に払拭し、一般的・普遍的である。資本主義的生産様式が支配する社会の価値は商品価値以外にはない。それは、諸価値のうちの単なる一つの価値なのでは決してない。これまでの諸々の価値、例えば従来の〈真・善・美〉¹³²⁾等々は商品価値に結び付けられる限りで価値として認められるものとなる¹³³⁾。巷間に言われる「価値の多様性」とは従来の諸価値が商品価値に凝縮され従属する様態を言い表わしたもの以外ではない。商品価値が、それこそがそしてただそれだけが、人々の生活行動・経済活動・社会的行為の全般にわたって貫く普遍としての価値としてあり、個々人から引き剥がされた抽象的普遍性としてあるがゆえに、もはや価値としては人々に意識されることもないものとして人々の〈生〉に血肉化されることになる。

だがしかし、これまで何度も述べてきたように、人々は決して価値(商品価値)を自らの〈生〉における価値として意識化しているわけではない。人々はただ、諸労働生産物を商品として互いに交換している、つまり諸労働生産物を直ちに交換価値にし、そのように行動しており、それを日常意識としているのである。決して価値として諸商品を等置していると意識しているわけではない。こうした無意識的行為を通じて、その現実において、人々は商品価値を自らの〈生〉における価値としているのである。それゆえ、諸商品の等置が、交換価値におけるものではなく他でもなく価値、その究極的に抽象的で純粋に社会的な価値におけるものであることは、まさしくマルクスによってまったく新たに〈発見〉されたことなのである。

そもそも商品を労働生産物として把握することは容易であり、更に商品を一方では具体的有用労働の結実として、他方では抽象的な人間労働一般の結実として捉えることも決して困難なことではない(もちろん、商品に表わされた労働をこの二重の労働に還元することは初めてマルクスによってなされたことであり、古典派経済学によっては成し遂げられなかったことではあるが、しかし一旦マルクスによる成果が得られた以上、それを再確認することは分析的思惟にとっては容易である)。ある程度の抽象化が必要であるとはいえ、諸商品が労働生産物という属性をもつということはあくまで感性的に捉えられうる範囲内のことである。だが、にもかかわらず、人々は諸商品を共通な属性である労働生産物という属性において互いに等置するのではない。人々は、労働生産物という属性においてではなく、価値というまったく抽象的で純粋に社会的な属性において、つまり決して五感では捉えられない属性において、諸商品を互いに等置するのであり、しかもそれをまったく意識せず無自覚なままに行なうのである。それが日々膨大に遂行されているのである。なぜなのか。なぜ人々は労働生産物という感性的に捉えられうる属性において諸商品を等置しないのであろうか。なぜ人々はそれを意識して行ない得ないのだろうか。だがこの現実こそ、人々の到達した社会性の水準が現われているのである。つまりそこに、人々の社会的労働の在り様が、だから富の産出の在り様が示されているのである。社会的富の産出が、相互に独立して営まれる私的諸労働という在り方に規定されているかぎり、ここを超出することは可能ではないのである。だからこそ、人々は相互に独立して営まれる私

的諸労働の諸生産物を、互いに商品として等置し、直ちに交換価値にするのである。人々はこのことを余儀なくされているのである。

そうであればこそ、交換価値ではなく、価値という決して感性的には捉えられない、極度に抽象的で純粹に社会的な価値において諸商品は等置されている、と喝破したことこそが、マルクスにとっての根源的価値批判であったわけである。こうしてはじめて、類としての人間が遂行する「創造的素質を絶対的に産出すること」、「生成の絶対的運動」という〈富—価値〉生成の運動を、資本主義的生産様式が支配する社会の生産の現実のうちに、完全に転倒され絶対的に否定されたものとして、マルクスは別扱することができたのである。これこそがマルクスによる全批判の基底である。

おわりに

資本主義的生産様式が支配する社会は単なる商品生産の社会ではない。そこでは、諸商品も貨幣も資本の存在形態である、と共に資本もまた広い意味での商品の一形態である。そして資本は何よりも「増殖しつつある価値」である。もはや特定の〈体〉に固定されない運動しつつある価値、しかも増殖しつつある価値、——これが資本なのだ。

[資本の一般的定式 $G - W - G$ においては] 商品も貨幣も、ただ価値そのものの別々の存在様式としてのみ、[...] 機能する。価値は、この運動のなかで消えてしまわないで絶えず一方の形態から他方の形態に移って行き、そのようにして、一つの自動的な主体に転化する。[...] 価値はここでは一つの過程の主体になるのであって、この過程のなかで絶えず貨幣と商品とに形態を変換しながらその大きさそのものを変え、原価値としての自分自身から剰余価値としての自分を突き放し、自分自身を増殖するのである。なぜならば、価値が剰余価値を付け加える運動は、価値自身の運動であり、価値の増殖であり、したがって自己増殖であるからである。価値は、それが価値だから価値を生む、という隠秘的な性質を受け取った。¹³⁴⁾

等価形態の謎性に基づいて貨幣の神秘性が生まれるのであったが、貨幣を一般的な・独立した形態とする資本においては、この神秘性ははるかに拡大し深化する。資本は自己増殖する力を保持するもの、「価値だから価値を生む」価値という神秘的・隠秘的なものとして現われる。しかも資本主義的生産様式の発展に伴って次のような事態が進行する。

相対的剰余価値と本来の独自の資本主義的生産様式の発展につれて、労働の社会的生産力も発展するのであるが、この発展につれて、これらの生産諸力も、直接的労働過程での労働の社会的な連関も、労働から資本に移される。それだけでも資本はすでに非常に神秘的なものになる。というのは、労働のすべての社会的生産力が、労働としての労働に対立して資本に属する力として、資本自身の胎内から生れてくる力として、現われるからである。¹³⁵⁾

ここでは、「他人の労働にたいする指揮権」は、価値としての資本による直接的労働に対する指揮権の発動、直接的労働に対する支配の確立とその拡大・深化として現われる（ここでは価値は、支

配そのものを目的とはしないにもかかわらず、支配を不可欠な・絶対的な条件とするのである)。資本は何よりも価値、蓄積され増殖していく価値であるが、それは価値を創造する労働から捉え返せば、蓄積された過去の労働でありさらなる蓄積の運動主体であって、それゆえ、「他人の労働にたいする指揮権」の発動は、過去の労働による、生きた労働に対する指揮権の発動であり、過去の労働の下への生きた労働の吸収である。過去の労働に基づく価値としての資本の下への、価値の源泉としての労働の隷属、しかもますます拡大し深化していく隷属の進行である。

こうして、個々の具体的在り様から完全に解き放たれ、資本の運動に集約された価値の運動は、過程の唯一の主体として、直接的労働に対する指揮権を際限なく発動しつづけることになる。つまり蓄積された価値による、価値の源泉に対する指揮権の際限なき発動である。しかもこの露骨きわまりない運動が、資本のもつ神秘的な力によって隠蔽され、より一層神秘的なヴェールで覆われるのである。

まず、流通過程の存在がある。流通過程は生産過程からはまったく切り離された部面であり、しかもまさしくそこにおいて価値が実際に実現される部面であるので、剰余価値も含めて価値がそこにおいて実現されるだけではなく、実際に生み出されるかのような外観が生まれる。しかも流通過程は激しい競争の現場であって、ちょっとでも他人を出し抜こうとする言動、詐欺や瞞着の溢れかえった場面であり、それゆえかの誤った外観がより一層強まる。

また、剰余価値が利潤に転化し、さらには利潤が平均利潤へと転化することによって、資本の増殖はますます直接の労働の場面から切り離され、資本しかも今では個別資本の生み出す利潤もそれが直接生み出す剰余価値から切り離され、総資本の運動に関係させられる限りでもたらされるものということになる。利潤が、直接的労働から切り離され、それと無関係に資本自体が生み出すものという外観がより一層強まる。そして更に、利潤の企業利得と利子とへの分割とその固定化が起こる。これは決定的な飛躍である。

[企業利得という] 利潤の一部分は、他の部分に対立して、資本関係からまったく切り離され、賃労働の搾取という機能（賃労働の管理に不可分で自然な）からではなく、資本家自身の賃労働から発生するものとして現われる。そしてこの部分に対立して、利子が、賃労働にも資本家の労働にもかかわりなしに、自らの固有な・独立した源泉としての資本から発生するかのように見える。資本は、元々は、流通の表面では、価値を生む価値という資本物神として現われたとすれば、それが今では利子生み資本という姿で、その最も疎外された、最も特殊な形態にあるものとして現われるのである。¹³⁶⁾

いわゆる経営と所有の分離、というわけだ。ここでは利潤の一部が企業利得として、すなわち、経営（現実資本の）という厄介で複雑きわまりない、高級な労働に対する支払として現われる。資本家階級の一員たる経営者たちは、賃労働者階級に対立する者としてではなく、それと相並んで、その一員として（そのもっとも高級なそれとしてではあるが）現われる。他方で、利潤の他の部分が利子、本来の資本の果実として現われる。利子生み資本としての資本が、文字通り本来の資本として現われ、利子は、資本自体に本来そなわった自己増殖力の発現の結実として現われる。資本はまさしく資本であるがゆえに自動的に利子という果実を生むわけである。ここでは、資本は直接的労働とはまったくかわりのない、自動的に利子を生み出すものとなる。資本は労働と対立しているのでもなく、

ましてや労働を自己の下に隷属させているのでもなく、ひとえに創造的力を固有の属性とするもの、富の唯一の源泉であり、こうして利子生み資本が資本の本来の定在様式となる¹³⁷⁾。

ところで、利子生み資本形態の発展は、架空資本の発展と軌を一にしている。種々の国債・公共債・私債などの債権、これまた株式などの様々な証券、更には諸々のデリヴァティブなどのいわゆる金融商品、等々の架空資本が、信用諸機構・諸制度の発展を前提として形成され、利子生み資本形態をとって運動し、それこそ全世界を徘徊する¹³⁸⁾。

これらの債権・証券等は基本的に債務証券であり、未だ実在していない、将来の生産に対する価値請求権である。それゆえ、それらはそれ自体としては決して価値でないばかりか、何らの物的な〈体〉、使用価値をもっていない。価値という属性をもたないばかりでなく〈体〉を完全に欠落させたこれらの諸価値請求権が、一定の発展を遂げた信用機構・制度の下で架空資本に転化するのであって、それゆえ、これらの架空資本の蓄積は、諸々の債務証券の蓄積、すなわち負債の蓄積なのであるが、しかしこれが富の蓄積とみなされるようになるのである。

架空資本の蓄積は、何らかの物(Ding)としてはまったくの〈無〉である。ただ、純然たる観念(例えば記憶など)だけであったならば絶対的な無に帰することになるので、これを避けるためにせいぜい紙、また今日では多くは電子的データが、単なる記録としてこの世にその痕跡をとどめることになるのである。だがにもかかわらず、架空資本はあくまで資本として現われる。つまり、人々に対する強制力・支配力をもった物象(Sache)である資本として現われるのである。物(Ding)としてはまったくの〈無〉であるにもかかわらず、物象(Sache)としては厳然として存在し、かかる物象である資本として社会的力・強制力・支配力をもって全世界を徘徊・運動しているのである。

また「他人の労働に対する指揮権」としては未だ実在していない〈未来〉の労働への指揮権の蓄積でしかないにもかかわらず、それを確実に現実化するために〈いま・ここ〉の人々を社会的に束縛・拘束しているのである。架空資本の蓄積は、〈未来〉の世代、〈未来〉の人間が行なう直接的労働に対する指図証・指揮権の蓄積であり、子どもたちに対して、さらには未だ生まれてもいない人々に対してさえも隷属を命令する指揮権の蓄積なのであり、これを実現するためへの〈いま・ここ〉の人々に対する束縛と拘束なのである。これが富とみなされるのであるから、こんなにおぞましいことはない。これほどまでに〈富 - 価値〉の転倒が進行する¹³⁹⁾。

だが、再度先の「1857 - 1858年草稿」からの引用に立ち戻るが、「偏狭なブルジョア的形態が剥ぎ取られれば」としてマルクスは〈富 - 価値〉の根源的再措定を行なっている。「富は、普遍的な交換によって作りだされる、諸個人の諸欲求、諸能力、諸享楽、生産諸力、等々の普遍性」であり、「自然諸力にたいする、すなわち、いわゆる自然がもつ諸力、ならびに、人間自身の自然がもつ諸力にたいする、人間の支配の十全な発展」、つまり、「先行の歴史的発展以外にはなにも前提しないで、人間の創造的諸素質を絶対的に産出すること」とマルクスは明言する。そしてこの類としての人間の産出の「歴史的発展は、発展のこのような総体性を、すなわち、既存の尺度では測れないような、あらゆる人間的諸力そのものの発展の総体性を、その自己目的にしている」のであり、「そこでは人間は、自分をなんらかの規定性において再生産するのではなく、自分の総体性を生産」し、また、「そこでは人間は、なにか既成のものに留まろうとするのではなく、生成の絶対的運動の渦中にある」のだ、と言うのである。

このマルクスの言明はきわめて抽象的であり精確に理解するのが困難だが、「1857 - 1858年草稿」から『資本論』へといたる過程を踏まえれば、次のように理解することができる。資本主義的生産

様式が支配する社会では、富は商品集積として現われ、また価値は量に類落し価値実体 (= 商品に表わされた抽象的人間労働) によってその量が規定される商品価値として現われざるをえないということ、この転倒した〈富 - 価値〉の姿をマルクスは捉えた。そして更に、その転倒の進展・深化の過程を〈利子生み資本 - 架空資本〉の姿にまで追究した。

それと共にマルクスは、そうした完全に転倒したものでありながら、その完全に転倒した姿を通して、富は人間の類としての生きた活動・実践、人間の創造的諸素質の絶対的産出、その生成の絶対的運動としてあり、価値はそこにおける歴史の前方への志向性とその力のベクトルとしてあることを掴んだ。かくしてマルクスは〈富 - 価値〉を他でもなく根源的に自然の一部をなすとともに自然に支えられた類としての人間の絶対的社会性、その力・運動として把握したのであり、まさしくそこに〈商品 - 商品語〉世界の超出の条件を見、現実の〈富 - 価値〉に対する根源的批判を遂行したのである。

今日、われわれは更に、次のようにそれを捉え返すことができる。資本主義的生産様式が支配する社会の富は、商品の集積として現われていたが、その生産様式の発展の不可避な弁証法によって、今日では、商品の集積から架空資本の集積、つまり種々様々の債権・証券・いわゆる金融商品等の集積、端的に言って負債の集積へと転化するまでにいたっている。〈富 - 価値〉の転倒はかようなまでに徹底しており、究極の姿をもって立ち現われているが、しかしにもかかわらず、その「ブルジョア的外被」をいったん剥ぎ取ってしまえば、なお、その転倒の歴史、究極の姿にまで進行し深刻化した転倒の過程を貫いて、やはりマルクスが捉えたように、類としての人間の「生成の絶対的運動」、
「創造的素質の絶対的産出」をきわめて抽象的な形でではあるが厳然として捉えることができる。

だから問われているのは、その抽象性が具体的形態をどのようにして獲得することができるか、そのための条件は何か、ということを実際の資本主義の運動に対する根源的な批判的分析によって追究することである。これこそが、マルクスの〈富 - 価値〉の根源的批判を今日に継承することであり、そしてそれこそが、商品語の〈場〉によって人間語の世界が、包囲され侵食され包摂され食い破られ断片化され、言葉としての〈力〉を殺がれ、「つぶやき」や独り言にされ、更には沈黙を強いられ、いたるところで無効化されている現実¹⁴⁰⁾を止揚する条件、すなわち、人間語の世界をラディカルな批判力をもったものとして、まったく新しく創り出す条件を根元から探ることなのである。

註

97) MEGA, II/5, S.51.

98) *ibid.*, S.52-53.

99) *ibid.*, S.54. このパラグラフは第二版ではかなり書き換えられているが、初版の方が論理的にすぐれた記述になっていると思われる。というのは、商品は価値と使用価値の統一という矛盾として存在し、その矛盾が貨幣とそれ以外の商品との分離・対立にまで発展するということを明確に述べているからである。

100) *ibid.*, S.44.

101) *ibid.*, S.55-56.

102) 一社会内において金が貨幣の位置に座るや、少なくともその社会内では金以外の商品が一般的等価物になることはもはやない。また、世界貨幣として金が唯一のものとして認められるや、地域的歴史的に種々存在してきた金以外のあれこれの貨幣は金に統一される。地域や国によってその名目・名称・形態がいかに異なっていようと。こうして、貨幣はただ一つ金に固定され骨化する。もちろん、歴史上、巨大な世界恐慌や世界戦争の折には、貨幣そのものの喪失があり、それゆえ商品交換ならぬ物々交換が復活するということがあり得る。第一次および第二次世界戦争時とその終結直後のあれこれの地域や国々で、また

1929年からの世界大恐慌時にそうした事態が生じた。だがこれは、あくまで貨幣存在を許さない・必要としない経済諸過程の極度の縮退状況のゆえにあり得たことであって、商品生産－資本主義的生産様式の復活は当然ながらそれ自体が直接に貨幣の再生であったのであり、しかもその貨幣は代替物としてではなく本来の貨幣であるかぎり金でしかなかったのである。ところで、金貨幣に対して不換中央銀行券や種々の電子マネーや地域通過等々を持ち出すような混乱し誤った議論に関して一言注意しておきたい。理論としてはまず本来の貨幣について概念を正確に定立しておくことが求められるのであり、ここでは信用貨幣に関する議論を混入させてはならない。中央銀行券などの信用貨幣の概念は価値形態論および交換過程論からは導くことはできないのであって、高度な発展段階に達した信用諸制度・諸機構を前提するのである。それゆえ、われわれは本稿では信用貨幣は本格的には取り上げない（なお、近い別の機会にわれわれの見解を明らかにする予定である）。中央銀行券などはそれが兌換紙幣であろうが不換紙幣であろうが基本的に本稿の考察の範囲外にある。これに関しては註107)を参照のこと。

103) *ibid.*, S.58-59.

104) MEW, Bd.2, S.61. 前掲『マルクス＝エンゲルス全集』第2巻 大月書店、p.57。

105) MEGA, II/5, S.37.

106) 同上の物神性論の箇所¹⁾に次の一句がある（これはそのまま、第二版の第1章第4節にある）。「机が商品として現われるやいなや、それは一つの感覚的であると同時に超感覚的な物〔Ding〕に変わるのである。机は、その脚で地上に立っているだけではなくて、すべての他の商品に対立して頭で立っているの²⁾であって、その木頭から、机が自分かつてに踊りだすときよりもはるかに奇怪な妄想を繰り広げるのである。」(*ibid.*, S.44, MEGA, II/6, S.102.)。ここでマルクスはあらゆる商品の代表として机を取り出してそれが他のすべての商品に対して頭で立つと述べているわけだが、これはまさしく諸商品の価値対象性について言われていることであり、純粹に抽象的な社会性に関して述べられたことである。この社会性は人間－人間社会の社会性の完全な転倒＝疎外としての社会性である。だからそれは、一社会の唯一の一般的等価物として骨化された貨幣形態にこそ集約して現われるのであり、単に頭だけになるのである。

107) 本稿では中央銀行券などの信用貨幣に関しては考察の対象外としているが、行論の関係上必要な限りで少し述べておく。信用貨幣は支払い手段としての貨幣の機能から発生するのであって、それは単なる紙幣、すなわち貨幣章標・象徴貨幣が流通手段としての貨幣の機能から発生することと著しい対照をなしている。両者を混同することは許されず、概念として明確に区分しなければならない。もちろん貨幣はそれがどのようなものであれ貨幣として存在し機能している限り、流通手段であり、かつ支払手段でもあるのであって、とりわけ今日の貨幣制度・機構においては、不換中央銀行券として両者はまったく概念としても現実としても厳然と区別されながらも渾然一体・同時一体的となって運動している。だがあくまで、流通手段と支払・決済手段とを混同することは、議論をただ無闇に混乱させるだけである。今日、電子マネーによる取引や電子的な帳簿上の管理や記帳等々³⁾がきわめて大規模に行なわれているが、それらにおいて、いかに支払・決済の遂行が一見なされているかに見えるものがあるとしても、それは決して最終的な支払・決済にいたってはいないものであって、それとは別に、あくまで電子的データ等以外の実際の支払・決済の場面があるのである。だから、こうした電子マネーや電子的処理の大々的な登場に幻惑された金廢貨論や現金貨幣の無用論・廢止論等々の一切は、資本主義の現実を知らない夢幻境に彷徨うものでしかないのである。流通手段としての貨幣は徹底して観念化され縮減され、電子的処理に代替され得るが、支払・決済手段としては決してそのようなことはなされ得ず、最終的には必ず現実の貨幣・現金による支払・決済が行なわれなければならないのである。もちろんそれを、可能な限り「合理化」し、節約するために種々様々の技術的手段等が涙ぐましいまでに試みられるのであるが、しかしそれを〈ゼロ〉にすることは決して可能ではないのである。今日、アメリカのドル、信用貨幣の一つでありそれでしかないアメリカ・ドルが基軸通貨として君臨し、それを中心として全世界の諸決済システムが構築されているが、その現実もまた一歴史時代の一過的刻印を押されているのであって、それが世界資本主義の運動のなかでどのようになっていくのかは未だ確定的なことは誰も言えないのである。だがしかし、アメリカ・ドルといえどもそれはあくまで信用貨幣であり、それが全世界的な支払・決済手段として存在する歴史的現実的な諸条件があるというだけのことなのである。

108) 初版第1章の「(二) 諸商品の交換過程」の最後から二つ目のパラグラフに次のくだりがある（これは

そのまま第二版に引き継がれており、ここにも第二版価値形態論から交換過程論への論理的接続に関する無理が現われ出ている。これについては後に見る)。「すでに十七世紀の最後の数十年間に貨幣分析の端緒はかなり進んでいて、貨幣は商品である、ということが知られていたとしても、それはやはりただ端緒でしかなかった。困難は、貨幣が商品であるということを理解することにあるのではなくて、どのようにして〔wie〕、なぜ〔warum〕、何によって〔wodurch〕、商品は貨幣であるのか、ということを理解することにあるのである」(MEGA, II/5, S.58、MEGA, II/6, S.120)。価値形態論の課題、すなわち、労働生産物がどのようにして現実的に商品になるのかを解く、したがって「すべての商品の貨幣存在」を解き明かすという価値形態論の課題の困難さを、あらためてマルクスは述べていることになる。すでに存在している貨幣を対象として分析し、それもまた商品の一つであることを見出す課題への対比として、この困難が語られている。しかもマルクスの場合、貨幣もまた商品であることを明らかにするという課題でさえも、それまでの経済学者たちに比して徹底して根元から解決した。すなわちマルクスは、交換過程論において、単にすでに存在している貨幣を分析するのではなく、より根本にまで掘り下げ、諸商品自体の歴史的現実的な運動がある特定の商品に貨幣として析出することを明らかにし、より根源的に貨幣もまた商品であることを明らかにしたのである。そしてこれが可能であったのは、より困難な課題である、「どのようにして、なぜ、何によって、商品は貨幣であるのか」ということを交換過程論より以前に、価値形態論で十全に解き明かしていたからである。初版本価値形態論で、「どのようにして、なぜ、何によって、商品は貨幣であるのか」ということ、すなわち「すべての商品の貨幣存在」を見事に十全に解明し、これを踏まえて交換過程論において、貨幣もまた商品であることを根底から解いたわけである。こうして、交換過程論のほぼ最後のところで、あらためて価値形態論と交換過程論との関係について押さえたわけである。

ところが、この「どのようにして、なぜ、何によって、商品は貨幣であるのか」ということについて、久留間鮫造は、有名なテーゼを提出していた。曰く、「わたくしは、この『如何にして』と『何故に』と『何によって』とが、それぞれ、[第二版～現行版の]第一章の第三節〔価値形態論〕と第四節〔商品の物本性論〕と第二章〔交換過程論〕とで答えられているものと解するわけである」(前掲『価値形態論と交換過程論』p.41)と。だがこれは、久留間の完全な誤読である。久留間は初版と現行版との違いを把握していたにもかかわらず、結局は現行版を対象テキストとして採用してしまった。それゆえ彼は、「どのようにして、なぜ、何によって、商品は貨幣であるのか」というマルクスの交換過程論での言明がそもそも初版でなされ、それが初版本価値形態論をうけたもの、つまり、貨幣形態を論じていない初版本の価値形態論をうけてのものであることを過小に評価し、また、価値形態論で貨幣形態を論じてしまった第二版(～現行版)の交換過程論にその言明がそのまま引き継がれたことによって、第二版(～現行版)では価値形態論と交換過程論との間に論理上の無理が生じていることをきちんと追究しなかったのである。このことの上に、かのテーゼが出されているわけである。彼は第二版(～現行版)に依拠することによって価値形態論をあくまで貨幣生成論として読んでいるのであり、しかも久留間はこれを徹底しようとする。だから、かの「どのようにして、なぜ、何によって、商品は貨幣であるのか」という言明を、商品から貨幣が「どのようにして、なぜ、何によって」生成してくるのかという課題として、しかもそれを突き詰めて捉えようとしたのである。だが、かの課題はこれまで強調してきたように、商品というものが内在的にも貨幣性についての課題、すなわち「すべての商品の貨幣存在」の解明を求めるものであって、商品からの貨幣生成を解くものではない。これは、第一に初版本の価値形態論では貨幣形態を論じていないこと、第二にこれをうけて交換過程論ではじめて貨幣生成を、歴史的現実的諸条件を考慮して解いていることを踏まえて、かの言明をすなおに読めば明らかである。「商品は貨幣である (Waare ist Geld)」と端的に述べているのだから。

久留間は、初版と現行版とのいわば一対一的対照比較における相違については正確に把握していることはもちろん、その内容や相互関係についても他の誰よりも深く追求したと言って良い。にもかかわらず、かのような誤読を犯したのはなぜなのか。その理由は、第一に現行版をテキストとすることによって価値形態論を貨幣生成論として捉えたこと、第二に、第二版(～現行版)の第1章第3節「価値形態または交換価値」から「第2章 交換過程」への議論全体をもって貨幣生成過程論として捉えたこと、第三に、その立場を徹底して論理的首尾一貫性を無理を犯してまでも追求したこと、これであろう。第一の点は、マルクス自身が第二版の価値形態論を貨幣生成論として叙述したことに基づいている。われわれは本〈V〉の

(ii) で詳しく論じたが、初版本文の価値形態論と第二版（～現行版）の価値形態論はその目的を異にしているのであって、初版本文価値形態論の目的が、労働生産物はどのようにして現実的に商品になるのか、したがって「すべての商品の貨幣存在」を解き明かすことにあるのに対して、第二版（～現行版）価値形態論の目的は、「貨幣形態の発生を示すこと」（MEGA II/6, S.81）にあるのである。後者に依拠するかぎり、価値形態論を貨幣生成論として読むことは不可避である。だがそうすると、初版からの書き換えを本質的に行っていない交換過程論との論理的接続に関する問題が当然出てくる。この難点を克服しようとして久留間は第二、第三の点に進まざるをえなくなり、かの誤読が生み出されることになったのである。初版本文にせよ、第二版にせよ、いわゆる物神性論のところまでは「商品」をタイトルとして括られているのであり、主体はあくまで商品である。この内の価値形態論と物神性論、および交換過程論を一括して貨幣生成過程論として捉えることはできない。だが久留間は、「貨幣の成立という観点から第一、第二章でのマルクスの叙述を見る」（前掲『貨幣論』p.13）という立場を明確にとっている。この点は、彼が編纂した『マルクス経済学レキシコン』（全15分冊、大月書店、1968年～1985年）の内、冒頭商品論から貨幣論までを主対象とする部分が「貨幣」をタイトルとした全5冊となっており、その編纂方針について「全体を二つに分けて、第一篇ではマルクスが『資本論』第一部第一篇「商品と貨幣」の第一章「商品」の第三節「価値形態または交換価値」と、第四節「商品の物神的性格とその秘密」と、第二章「交換過程」とで論じていることを、貨幣の成立という見地から独自の表題を設けて採録し、第二篇では、第三章「貨幣または商品流通」の基本的な内容を、いろいろな下位項目を設けて紹介することにし、それらの項目の適宜な個所に、[...] 第二部および第三部（ときには『資本論』以外のもの）からの引用を付け加えることにした」（同前、p.7）と述べているところに良く現われている。そしてこの立場の上で第三の点になるが、久留間はそれをより徹底し、「どのようにして、なぜ、何によって、商品は貨幣であるのか」の解明は、「商品の価格形態を分析」すること（前掲『貨幣論』、p.21）、つまり、商品が「どのようにして、なぜ、何によって」価格形態をとるのかを解明することだと捉えたのである。これについては久留間の弟子である大谷禎之介が「ドイツ語原文での『商品は貨幣である』という部分の意味が、先生のおっしゃるように、商品が価格形態をもつということ」であるとは「どうにも納得できない」（同前、p.59）と異議を唱えているが、久留間はそれに同意してはいない（同、p.63）。だが、ここまでくると誤読はあまりにもはっきりしている。そもそも初版本文では交換過程論までのところでは価格という用語は一切出てはこないのであって、だからその概念が規定されているわけではない。第二版では、形態Ⅰから形態Ⅱへの移行を論じた個所に、「単純な価値形態、すなわち一連の諸変態を経てはじめて価格形態にまで成熟するこの萌芽形態の不十分さは、一見して明らかである」（MEGA, II/6, S.93）なる一文があって、価格という用語が出てくるが、これは明らかに第三章「貨幣または商品流通」における議論の先取りとして述べているのであり（この先取りによって第二版の価値形態論が貨幣生成論として叙述されていることがより一層鮮明になっている）、ここでも価格—価格形態の概念規定がなされているわけではない。そもそも貨幣形態と価格形態とは概念として同一ではない。貨幣形態においては本質的には量的規定が量一般に抽象されたものとして捉えて良いものであって、つまり〈商品=貨幣〉という形態であるが、価格形態は一定の具体的量規定を絶対に要請するのであって、つまり、〈a量の商品A = x量の貨幣商品〉である。第二版（～現行版）においても、交換過程論までで貨幣形態の方は概念として規定されているが、価格形態は概念規定されていないのである。それは次の「貨幣または商品流通」のところでなされるのである。久留間はこの違いを無視している。久留間が「商品が価格の形態をもつのは、つまり、商品=貨幣という形態をもつのは、ある一商品が貨幣になった結果ですね」（前掲『貨幣論』p.58）と述べているところにこの点が良く出ている。ともあれ、このような概念規定上の無理を犯してまでも貨幣生成過程論を一貫して押し通すことが、かの有名なテーゼを押し出すことと結び付いているのである。

ところで、久留間の前掲『貨幣論』には、かの「どのようにして、なぜ、何によって、商品は貨幣であるのか」のフランス語版での表現をめぐる林直道との論争が収められている（同上、pp.41-63。「四『資本論』第一部フランス語版はなにを教えるか——林直道氏の所説に関連して（二）——」）。ドイツ語版（初版、第二版）では、「wie, warum, wodurch Waare Geld ist」であるが、フランス語版では、「comment et pourquoi une marchandise devient monnaie」となっている議論である。問題点は三つ。一つは、ドイツ語版では「wie, warum, wodurch」と三つの疑問副詞があるのに対して、フランス語版では「comment et

pourquoi」と二つになっている点。二つ目は、無冠詞の Waare に対して、フランス語版では、une という不定冠詞または数詞が付されている点。そして最後は、ドイツ語版の ist に対するフランス語版の devient という動詞の点。まず第一の点は、wie, warum, wodurch を『資本論』の三箇所に振り分けて議論する久留間にとっては大変悩ましいものであったに違いないが、林はまさしくこの点を突いたのである。この批判に対して大谷禎之介はフランス語 comment のうちにドイツ語 wodurch の意味が含み込まれており、それを敢えて別に、wodurch に対応する例えば、par quoi を用いた文章にするとフランス語の文章としては異様なものになるので対応を犠牲にした表現にしたのではないかと述べ、久留間もそれに同意している。この大谷の主張それ自体は正しいと思われる。だが、これによって久留間／大谷が林の批判に応えたことにはならない。久留間の主張がそもそも間違っているから問題がおこるのであって、かの「どのようにして、なぜ、何によって、商品は貨幣であるのか」というマルクスの言明は、価値形態論の課題について述べたものであり、初版本文価値形態論でその課題に十全に解決を与えている以上、そのあとの交換過程論で「wie, warum, wodurch」を「comment et pourquoi」にすることになんの問題もないのである。だが、第二、第三の問題は大きな問題を孕んでいると考えられる。ドイツ語版の「商品は貨幣である Waare ist Geld」(下線は引用者)がフランス語版では「ある商品が貨幣になる une merchandise deviant monnaie」(下線は引用者)とされたことは翻訳の限界を越え、別の表現になっていると思われるも当然だからである。なぜなら、フランス語版のこの一文は、価値形態論の課題が、諸商品からあるなんらかの商品が貨幣としてどのような過程をへて生成してくるのかを明らかにするものだ、とはっきりと明言するものになっているからである。これは単なる平易化とはまったく位相を異にする改変である。だが、ドイツ語版第二版と同時並行的に刊行作業が遂行されていたフランス語版のこの決定的な改変は、ひるがえって、フランス語版のみならずドイツ語版第二版もドイツ語版初版と決定的にその目的を異にする価値形態論をもつことになったことを鮮明に示すものである。ドイツ語版第二版ではこの言明は初版とまったく同一なのではあるが、にもかかわらず、貨幣生成論として叙述された価値形態論をうけてのその文章は、初版とは違った内容を伝えていると言っても良いと思われる。きわめて微妙な問題ではあるが、久留間のようにこの決定的改変を改変とは捉えず、「wie, warum, wodurch Waare ist Geld (どのようにして、なぜ、何によって、商品は貨幣であるのか)」を「どのようにして、なぜ、何によって、商品から貨幣が生成されるか」として理解する論者が少なからずいるからである。というよりはむしろ、第二版(～現行版)をテキストとするかぎり、このような解釈の方が論理的には筋が通ったものとみなされても仕方がないからである。また次のこともある。マルクスの死の直後に出されたドイツ語版第三版でもこの部分の叙述に変更はないし、マルクス自身による第三版のための草稿「『資本論』第一巻のための補足と改訂」および第二版自用本、フランス語版自用本への書き込みにもこの部分の改訂の指示はない。この事実は、フランス語版と第二版(～現行版)との相違ではなくてむしろその同一性、したがって逆にまったく同じ文章でありながら初版と第二版(～現行版)との意味内容の相違を示し、それをマルクス自身が積極的に容認していたのではないかと判断させるものである。

以上、久留間の主張への批判を通してかのマルクスの言明を見当してきたが、それは、あくまで初版本文価値形態論から交換過程論へと読むことによってこそ、その意義が捉えられるものなのである。

- 109) MEW, Bd.31, S.301. 前掲『マルクス＝エンゲルス全集』第31巻、大月書店、1973年、p.252.
 110) MEW, Bd.31, S.303. 同上、pp.253-254. 「第二ボーゲン」とあるのは、『資本論』初版の価値形態論の部分のことである。
 111) エンゲルスはこう言っている。「以前の叙述(ドゥンカー)[ドゥンカー社から刊行された『経済学批判』第一分冊のこと]に比べれば、弁証法的展開の鋭さという点での進歩は非常に大きい、叙述そのものでは僕には最初の姿でのそのほうがよいと思われる点もかなりある」と(ibid., S.303-304. 同上、p.254)。
 112) ibid., S.306. 同上、p.256.
 113) ibid., S.314. 同上、p.264.
 114) MEGA, II/6, S.93.
 115)、116) ibid., S.94.
 117) I から IV の各価値形態の名称が、初本文から第三版にかけてどのように変遷したのかを見ることに

よっても、この歴史的発展過程論的傾向がいかに強められたのかが判然とする。

〈形態Ⅰ〉：初版本文「*Erste oder einfache Form des relativen Werths*（相対的価値の、第一のまたは単純な形態）」、初版付録「*Einfache Werthform*（単純な価値形態）」、第二版「*Einfache oder einzelne Werthform*（単純なまたは単一の価値形態）」、フランス語版「*Forme simple ou accidentelle de la valeur*（単純なまたは偶然的な価値の形態）」、第三版「*Einfache, einzelne oder zufällige Werthform*（単純な、単一のまたは偶然的な価値形態）」。

〈形態Ⅱ〉：初版本文「*Zweite oder entfaltete Form des relativen Werths*（相対的価値の、第二のまたは展開された形態）」、初版付録「*Totale oder entfaltete Werthform*（総体的または展開された価値形態）」、第二版「*Totale oder entfaltete Werthform*（総体的または展開された価値形態）」、フランス語版「*Forme valeur totale ou développée*（総体的または発展した価値形態）」、第三版「*Totale oder entfaltete Werthform*（総体的または展開された価値形態）」。

〈形態Ⅲ〉：初版本文「*Dritte, umgekehrte oder rückbezogene zweite Form des relativen Werths*（相対的価値の、第三の、倒置された、または逆の関係にされた第二の形態）」、初版付録「*Allgemeine Werthform*（一般的価値形態）」、第二版「*Allgemeine Werthform*（一般的価値形態）」、フランス語版「*Forme valeur générale*（一般的価値形態）」、第三版「*Allgemeine Werthform*（一般的価値形態）」。

〈形態Ⅳ〉：初版本文〔名称なし〕、初版付録「*Geldform*（貨幣形態）」、第二版「*Geldform*（貨幣形態）」、フランス語版「*Forme monnaie ou argent*（マネーまたは貨幣の形態）」、第三版「*Geldform*（貨幣形態）」。

ドイツ語およびフランス語の単語の意味内容と対応関係、またそれらの日本語訳の問題で微妙な点があり、今後の研究課題として残るが、この変遷において注目すべきものは、第一に、フランス語版で初めて用いられ、第三版以降引き継がれた形態Ⅰの「偶然的な〔*accidentelle; zufällige*〕」という用語であり、第二に、形態Ⅱに初版付録以降に用いられた「全体的な〔*totale; totale*〕」という用語である。形態Ⅰは「偶然的な」ものであり、これが形態Ⅱで「全体的な〔*totale; totale*〕」ものに発展するという具合に規定されたことになる。とくに「偶然的な」という形態Ⅰへの規定は、価値形態のⅠからⅢへの展開を歴史的発展として叙述することへの明らかな指標になっているように思われる。ところで、「偶然的な」という用語に関して初版本文の価値形態論には、次のような件がある。「第一の形態 20 エレのリンネル = 1 着の上着においては、これらの二つの商品がこのような特定の量的な割合で交換されうるということは、偶然的な事実に見えることがありうる。これに反して、第二の形態においては、この偶然的な現象とは本質的に区別されていてこの現象を規定している背景がすぐさま明らかに見えてくる」(MEGA, II/5, S.35.)。ここでは、形態Ⅰと形態Ⅱとが比較されその本質的な区別が述べられているが、しかし、形態Ⅰが偶然的なものであると規定されているのではなく、むしろ偶然的なものと同様に捉えられるかもしれないが、本質的にはそうではないということが押し出されていると言って良い。こう見てくると、初版本文とフランス語版以降の叙述には文字通り本質的な違いが見られることが解かる。ところで、「偶然的な」という用語のフランス語版から第三版への継承が、マルクス自身による指示に基づくものなのかどうかという問題がある。第三版はマルクスの死の直後にエンゲルスによって刊行されたものであるからだが、MEGA, II/6. に収録されている『『資本論』第一巻のための補足と改訂』にも MEGA, II/8. に収録された第二版のマルクス自用本への書き込みにも、またフランス語版の自用本への書き込み (MEGA, II/7, S.732.) にも、その指示は見られない。フランス語版についてマルクスは「たとえときには、たしかに——主として第一章では——フランス語的な言い方で叙述を『平らにならす』ことを余儀なくされた」(ニコライ・フランツェヴィチ・ダニエリソン宛の 1878 年 11 月 15 日付手紙。MEW, Bd. 34, S.358) というようなことを述べており、フランス語版に、ある種の論理的展開上の問題点を意識していたことは事実である。だが、一方では「フランス語版では僕はかなり多くの新しいことを追加し、また多くの箇所を本質的に書き直した」(フリードリヒ・アドルフ・ゾルゲ宛の 1877 年 9 月 27 日付手紙。ibid., S.295.) という具合にも述べ、フランス語版特有の意義も強調しており (その多くは蓄積論に関する部分ではあるが)、フランス語版において「偶然的な」という用語がマルクス自身によって用いられたという厳然たる事実があり、第二版以降の価値形態論を歴史的発展過程的に叙述するという明白な傾向の自然ななりゆきとしてその用語の継承はあったと捉えるべきではないだろうか。ただこの点に関しては、マルクスによるロシアのミール共同体に関する研究およびいわゆるアジア的生産様式に関する研究の進展についても考慮する必要があるように思われる。そ

れは前掲モスト『資本と労働』の改訂作業（とくに価値形態に関する部分）とも考え合わせてなされるべき今後の研究課題である。

118) MEGA, II/5, S.639-640.

119) MEW, Bd.31, S.316. 前掲『マルクス=エンゲルス全集』第31巻、p.265.

120) MEGA, II/5, S.647.

121) MEW, Bd.31, S.306. 前掲『マルクス=エンゲルス全集』第31巻、p.256.

122) *ibid.*, S.306, 前掲『マルクス=エンゲルス全集』第31巻、p.256-257.

123) *ibid.*, S.306. 前掲『マルクス=エンゲルス全集』第31巻、p.256.

124) MEGA, II/6, S.80-81.

125) こうした歴史過程の叙述の究極的なものが前掲モスト『資本と労働』に対するマルクスによる改訂のうちにある。易しい入門書である当書で、価値形態論をどのようにするのかは悩ましいことであつたに違いないが、マルクスはこれを完全な歴史叙述に変えている。そこでは次のように叙述されている。労働生産物の交換の発生がまず歴史的に述べられ（いわゆる物々交換の発生）、その頻度の高まり=恒常化による交換比率の確定とそれらの労働生産物の価値物=商品への転化（これは突如、説明抜きに言われる）として価値形態の形態Ⅰが示される。次いで形態Ⅱ、すなわち全体的な、あるいは展開された価値形態が、「シベリアの狩猟種族」を例として取り上げられ、毛皮が他の様々な商品と交換される「ほとんどただ一つの財貨」となっているとされ、こうして「毛皮の価値を毛皮の使用価値から分離」することが習慣化し確定し、「この価値の大きさの表現が確定するように」なると述べられる。この上で一般的価値形態、貨幣形態が次のように語られる。「こんどは、この取引を、異郷の商品所持者の側から観察してみましょう」として視点の逆転を要請し、「彼らの各人はシベリアの狩人たちにたいして、自分の財貨の価値を毛皮で表現しなければなりません」として毛皮が一般的等価物になっているという。こうして、「毛皮は生産物交換のこの範囲のなかで貨幣となるのです」と毛皮が貨幣形態になることを言うのである（前掲邦訳書、pp.39-40）。この叙述は価値形態論の核心をすっかり洗い流した議論である。ここで例として取り上げられている毛皮は次第に貨幣になっていくのではなく、既に立派に貨幣であり、だからここでマルクスは貨幣から貨幣を解いていることになる。この議論はもちろん『経済学批判』の価値形態論、「本来の困難を避けた」とマルクス自身が述べたそれよりも後退している。

ところで、初版本文価値形態論から第二版価値形態論への書き換えに関するハンス・ゲオルク・バックハウス、ヴィンフリート・シュヴァルツ、そして佐藤金三郎らの議論について、ここで一言述べておく（Backhaus, Hans-Georg, »Materialien zur Rekonstruktion der Marxschen Werttheorie«, in *idem.*, *Dialektik der Wertform. Untersuchungen zur marxischen Ökonomiekritik*, Freiburg, Ça ira, 1997., S. 65-298. [初出は、*Gesellschaft. Beiträge zur Marxschen Theorie*, Nr. 1, S. 52-77., 1974.; Nr. 3, S. 122-159., 1975.; Nr. 11, S. 16-117., 1978.; Frankfurt am Mein, Suhrkamp Verlag. 上記3回に分載論文をそのまま統合して所収してある。そのため同論文ではMEGAの成果がほとんど活用されていない].; Schwarz, Winfried, »Die Geldform in der 1. und 2. Auflage des "Kapital". Zur Diskussion um die "Historisierung" der Wertformanalyse«, in *Marxistische Studien. Jahrbuch des IMSF*, Nr. 12., Frankfurt am Mein, Institut für Marxistische Studien und Forschungen, 1987, S. 200-213.; Hecker, Rolf, »Zur Entwicklung der Werttheorie von der 1. zur 3. Auflage des ersten Bandes des "Kapitals" von Karl Marx (1867-1883)«, in *Marx-Engels-Jahrbuch*, Nr. 10., Berlin, Dietz, 1987., S. 147-196.; 佐藤金三郎『『資本論』研究序説』、岩波書店、1992年等。われわれと同じ広い射程で対象をみついているのは、ヘッカーの論文のみだが、そのタイトルからすぐ判るように、ヘッカーは彼の言う「史的唯物論」のドグマに忠実に、『資本論』第1巻の価値論が版を重ねるごとに歴史的契機を組み入れて進化/深化したという「前提」によって結論を先取りしており、叙述の内容の詳細な検討は後景に退いてしまっている）。初版本文価値形態論の〈論理〉説から第二版の〈論理=歴史〉説への移行、それに伴う諸問題に関する議論である。そうした議論から言えば、われわれの立場はより徹底した〈論理〉説ということになろうが、しかし問題は、単に論理か歴史か、ということではなく、価値形態論の課題は一体何であつたのかという点にある。われわれは何度も強調してきたように、価値形態論の課題はひとえに、労働生産物は一体どのようにして現実的に商品になるのかを解くこと、それゆえ「すべての商品の貨幣存在」を解くことにあると

考えている。だが、Backhaus たちもまた結局のところ、その課題は貨幣生成を解くところにあると捉えているのである。たとえば佐藤は次のように述べている。「『資本論』第二版における、とくに問題になっている価値形態論における書き換えですが、そこでは初版に比べて価値形態分析の『歴史化』が生じていると見ている点では、彼〔シュヴァルツ〕の解釈もバックハウスの解釈とまったく同じなのです。同じなのですが、しかし、結論が違う。バックハウスはそれを後退または『俗流化』と見ているのに対して、シュヴァルツはそれを『改善』またはいっそうの発展と見ている〔…〕。／しかし、この結論が正反対だというのは見かけだけのものだと思います。〔…〕価値形態論解釈という点では、シュヴァルツはむしろバックハウスとほとんど同じなのです。つまり、シュヴァルツの場合には、第二版の価値形態論に見られる『歴史化』は『資本論』の影響力を強めるという方向での叙述の『改善』であって、商品から貨幣の発生の概念的＝論理的分析が依然としてそこでの主要な契機をなしているという点では、第二版も初版となんら変わりがない、その意味ではバックハウスの解釈とは違って、初版と第二版とのあいだには方法論または理論のうえでの変化はないというわけです。／私がシュヴァルツの議論に対して疑問を感じるのは、その点なんです。〔…〕むしろ、バックハウスのように、マルクスは論理説から論理＝歴史説へ移行したと解釈するほうが自然なんじゃないかと思うのです」（前掲『『資本論』研究序説』、pp.364-365。／は原文改行箇所）。結局、Backhaus も Schwarz（さらには Hecker らも）価値形態論を貨幣生成論として捉えているという点では同じであり、ただそれを、前者は論理的に、後者は歴史過程的に解くという点で異なっている、ということである。そして佐藤が Backhaus に与していることになる。Backhaus たちは、第二版～第四版（現行版）に引きずられ、初版本価値形態論の形態Ⅳが貨幣形態ではない、つまり初版本価値形態論では貨幣形態を論じていないのに対して、初版付録以降、形態Ⅳが貨幣形態になっているというもっとも重要な相違について突っ込んで探究せず、それゆえその相違を軽視あるいは過小評価し、ここから価値形態論の本来の課題を捉えそなかったのである。こうした根本的な欠陥があるが、彼らのテキスト分析・批判は歴史的に大きな意義をもつと、われわれは考えている。

126) MEGA, II/5, S.648, MEGA, II/6, S.101.

127) MEGA, II/5, S.47, MEGA, II/6, S.106.

128) MEGA, II/5, S.47, MEGA, II/6, S.106.

129) MEGA, II/1-2, S.392. 「1857-1858年草稿」より。カール・マルクス著資本論草稿集翻訳委員会訳『マルクス 資本論草稿集2 1857-1858年の経済学草稿Ⅱ』大月書店、1993年、pp.137-138.

130) 「欲求 *besoin*; *need*」と「欲望 *désir*; *desire*」とを区別する周知の議論を踏まえて言えば、ある事物・事象を価値だとすることは当然欲望に根ざすものと考えられるが、しかしここで指摘しておきたいことは、価値というものはそうした欲求と欲望の差異や同一性の範疇を超え出た〈あるもの〉である、という点である。この点から言えば、通俗的・常識的資本主義批判を展開するテル・ケル派のボードリーやゲー等を、欲求 (*besoin*; *need*) と欲望 (*désir*; *desire*) の概念区分に基づいて批判するジャン・ボードリヤールの議論＝「記号の政治経済学批判」なるものは、せいぜい気の効いた、しかし無力な文明批評でしかない。ボードリヤールは欲望 (*désir*) を、使用価値に対する価値（ただし彼は価値ではなく交換価値と言っている）に重ね合わせる形で考えようとし、交換価値に対して使用価値を対抗的に価値化しようとするテル・ケル派のボードリーとかゲー等を批判する（今村仁司／宇波彰／桜井哲夫訳『記号の経済学批判』法政大学出版局、1982年）。テル・ケル派のボードリーなどが、使用価値にシニフィアンを、交換価値にシニフィエを対応させたのに対して、ボードリヤールは逆に、交換価値にシニフィアンを、使用価値にシニフィエを対応させ、「使用価値のフェティシズムは、交換価値のフェティシズムよりももっと深く、もっと《神秘的》である」（同上、p.172）という具合に、価値よりも使用価値の方が神秘的でイデオロギッシュなものだと主張する。こうして彼は、「物を欲求 [*besoin*] の観点からみる素朴な見方や使用価値優先の仮設をのりこえ」（p.1）の必要があると強調し、彼独自の「記号の政治経済学批判」を主張するのである。こうしたボードリヤールの議論は、商品が自らの〈体〉を〈忘れてしまう〉ものであることをある意味で反射したものであり、とともに、今日の資本主義においては利子生み資本形態をとる架空資本が全世界的に全面化する段階に達することによってあらゆる商品が、〈体〉そのものの完全な欠落と〈未来〉に対する指揮・命令権の発令＝〈未来〉に対する収奪の宣言とを反映していることを、微妙に反射したものであることを示している。だがしかし、その「記号の政治経済学批判」は、なぜ商品が彼の言う記号と化して

しまうのか、また使用価値でさえ自然から剥離して観念化し抽象化してしまうのか、という現実を探究することができず、かくしてその現実には拝跪し、今日の資本主義の現実を隠蔽するものになる。

131) MEGA, II/5, S.52. MEGA, II/6, S.114.

132) 「従来の〈真・善・美〉」と述べたのは、いうまでもなくI・カントが成した哲学的成果についての論点である。カントについては柄谷行人が『トランスクリティーク』(批評空間、2001年；ただし柄谷が底本とするように指示している『定本 柄谷行人集3 トランスクリティーク』(岩波書店、2004年)を用いた)において、「『物自体』とは『他者』のことである」と、カント哲学のもっとも重要な概念のひとつである「物自体」について重要な指摘をしている(同書第1部第1章、p.70.)。「他者として」という問題を柄谷が設定したことは、マルクスの思想を見通そうとする試みの「前提」におかれたカント解釈としては、大きな意味をもつていよう。だが、カントが『純粹理性批判』第二版の序文で自らの立場を「コペルニクスの転回」と呼んだことが適正だとすれば、柄谷の指摘は従来の主流派解釈を踏襲し現代風に敷衍したものととらえて差支えないだろう。そのうえでわれわれが指摘しておきたいのは、柄谷が三批判のみを科学認識・道徳・芸術、すなわち〈真・善・美〉を取り扱った体系とみなしている、という点である。『トランスクリティーク』では、その解釈にさまざまな知見が修飾されているが、軸となっているのはあくまでも〈真・善・美〉＝三批判という考えであり、カント研究が到達した地平から一歩たりとも踏み出しをしないどころか遥か手前で床屋政談をするような、じつに「穏当」なものである。しかしながら、マルクスとの遠近法あるいは接合においてわれわれが重視すべきは、三批判への「閉じ籠もり」を超えることである。具体的に言えば、その「全面的発掘」(1936～1938年)がなされている過程でH.-J. de ヴレーショヴェールが三批判の体系をさらに包みこむ「方法」の可能性を看取り(Vleeschauer, H. -J. de, *La Déduction transcendentale dans l'Œuvre de Kant*, Tome III, Anvers-Paris-La Haya, Librairie Félix Alcan, 1937.)、ヴィットーリオ・マチウが『判断力批判』の有機的展開を可能とする読みを提起した(Mathiu, Vittorio, *Kant Opus postumum*, Roma, Zanichelli, 1963.)、カントの『遺稿 *Opus postumum*』(1796? - 1803?)である。この新たな探求は、ジョヴァンニ・ピエトロ・バジーレがカント哲学とくに三批判の「体系性」と『遺稿』との関係に関する問題設定を総括して研究史上での『遺稿』の位置づけを緻密に跡付けているように(Basile, Giovanni Pietro, *Kants »Opus postumum« und Seine Rezeption*, Berlin u. Boston, Walter de Gruyter GmbH, 2013.)、たとえば『遺稿』英語版監訳者のエッカート・フェルスター^{ジンターゼ}が長年にわたる緻密な分析・考察のすえに達した、カント哲学(倫理・神学)総体の「開かれた総合」としての『遺稿』とする視点のごとく(Förster, Eckart, *Kant's Final Synthesis: An Essay on the Opus postumum*, Cambridge, Mass., Harvard University Press, 2000.)、見事な学的成果を生み出しているからである。パスカルの『パンセ』にも似た位置にあるカントの『遺稿』において表現され、マルクスへの道を切り拓いているのは、「開かれた総合」においてようやく、類としての人間の「生成の絶対的運動」、^{ジンターゼ}「創造的素質の絶対的産出」を発現させる場を獲得した集団的・知的・政治的格闘が有する力能(Potenz)なのである。

133) 商品価値とそれ以外の諸価値との関係について少々述べておく。商品価値は、それに先行する諸価値を集約し総括し、それまでのどんな価値よりも人間の類性格をその抽象的な在り方において表出している。しかもそれは、商品価値でしかないことにおいて、つまり人々の生の在り様に外的に対立する商品価値でしかないことにおいて、完全に転倒した価値である。価値はいま、商品価値として、徹底して対象的な・外的な形態にある。商品価値は社会性を抽象的普遍としての純粋な社会性として表わし、個人的なものを単に私的なものとして自らに対立させる。しかし、価値がこのように完璧に否定的な形態において定立されたということこそが、偉大な歴史的な実現なのである。類としての人間の普遍性が、まったく抽象的普遍として、究極にまで質が抽象化された商品価値として現われ出たのだ。言うなれば、広く社会的に交換され売買される〈場〉の水準にまで価値が社会化され普遍化されたのだ。こうした点で言えば、商品価値以前の諸々の価値——〈真・善・美〉等々——の社会性・普遍性は商品価値に比べれば決定的に低い水準にあるのであり、個別的なあるいは特殊な衣を纏って立ち現われていたのである。商品価値はこの狭い枠を完全に突破する。ただし徹底した抽象的普遍性として・完全に転倒された価値としてではあるが。この商品価値に対して、〈真・善・美〉等々としてある諸々の価値は、価値の社会性を一身に体現している商品価値に対して、単なる偶然的・個人的・私的なものとして商品価値に対立するか、むしろほとんど

の場合、商品世界の内に取り込まれ、価値としては商品価値に包摂されるものとなるのである。今日では、〈真・善・美〉等々は基本的に商品価値と結び付かない限り、普遍性をもたず、社会的に承認されるものではないのである。つまりそれらはもはや言葉の本来の意味通りの〈真・善・美〉とは言えないものとなっている。人々は現実には、商品関係の中に、それらを通じ、それらの媒介を通して、諸々の価値—〈真・善・美〉等々を追求しているのである。それを意識しているか否かにかかわらず、人々はそのように行動しているのである。だから「もし商品がものが言えるとすれば、商品はこう言うであろう」、すなわち商品語で次のように語るであろう。「人間は、価値について哲学的・倫理的・美学的な〈物語り〉を飽くことなく繰り返しているが、それらは実際のところ価値ではない。価値はわれわれにそなわった価値—商品価値のことであり、それ以外に価値はない。人々の語る場所はそれとは違っているが、実際の人々の行動がそれを示している」と。

だが、にもかかわらず、人々は例えば古代ギリシアにまでさかのぼって人間にとっての〈真・善・美〉等々を探る試みをやめることがない。例えばプラトンにとっての〈真・善・美〉はやはり誰かれの心を動かすであろう。つまりそれはなお、彼らにとって価値であるだろう。ここでわれわれは、古代ギリシアの芸術について語ったマルクスを思い起こすことができる（MEGA, II/1-1, S.44-45. カール・マルクス「経済学批判序説」より。前掲『マルクス 資本論草稿集①』大月書店、1981年、pp.64-66.を参照のこと）。マルクスはここで、「〔…〕困難は、ギリシアの芸術や叙事詩が、ある社会的な発展諸形態と結びついていることを理解する点にあるのではない。困難は、それらがわれわれにいまなお芸術上の楽しみをあたえ、またある点では規範として、そして到達できない模範としてその意義をもっているということにある」として、「おとなは二度と子どもになることはできないし、でなければ子どもっぽくなるだけである。しかし子どもの無邪気さはおとなを喜ばせはしないだろうか？ そしておとなが子どもの真実を再生産するために、より高い段階でふたたび自分で努力してはならないだろうか？ 〔…〕彼らの芸術のわれわれにとっての魅力は、それが成長した地盤である未発達な社会段階と矛盾するものではない。魅力はむしろ、そのような社会段階の結果であって、むしろかの芸術がそのもとで成立し、またそのもとでだけ成立することのできた未成熟な社会的諸条件が、けっして帰ってくることはありえないということと不可分に関連しているのである」と言っている。マルクスが語ったギリシア時代の諸々の芸術、そしてプラトンの語ったところのものもまた、類存在としての人間の普遍性の発現、生きた人間活動として一瞬垣間見せた、その絶対的普遍性の残光であろう。今日のわれわれもそれを感じることができ。なぜなら、限定された諸条件の下において、またそうした限界付けられた在り様としてではあるが、自然としての人間の、類としての人間の〈生〉のもっとも根源的な〈閃光〉がそれらに強く鮮やかに露出しているからである。

ところで、〈正義〉という概念が〈真・善・美〉に結び付けられて問題とされることがある。それは〈法・国家〉における〈真・善・美〉の問題として論じられるのであり、〈真・善・美〉の政治的領域における問題であるが、本稿ではそれについて本格的に問題にすることはできない。ただ、原則的な点に限って言い得ることは、根源的な〈価値〉批判が求められたように、根源的な〈正義〉批判が問われるということである。というのは、そこでの〈国家・法〉は、資本主義的生産様式が支配する社会を所与のものとするかぎりでは、ブルジョアの市民社会とそこにおける独立した人格としての近代的個人なる観念類型に照応する〈ブルジョア的的政治的国家体系・ブルジョア法体系〉であるよりほかはなく、〈正義〉それ自体が問題とされ、その内実が探究され、その何らかの実現が希求されるかぎり、それがいかにブルジョア的・帝国主義的正義への批判や抵抗や闘争等々を通じてなされるものであれ、またそれが、真の正義なるものを対置しそれを実現しようとするものだとしても、それは〈ブルジョア的的政治的国家体系・ブルジョア法体系〉に包摂され集約されざるを得ないからである。そもそも正義なるものはあくまで〈国家・法〉（ブルジョア的なものにおけるそれらのみではなく）における〈真・善・美〉の在り様であり、類としての人間の疎外された観念形態であり、さらに、《〈ブルジョア的的政治的国家体系・ブルジョア法体系〉・〈市民社会・近代的個人〉》にあっては、その構造を基底的に規定する商品（〈商品・貨幣・資本〉形態をとって運動するそれ）の価値にあらゆる価値が集約されるからである。社会の共同性が政治へ、また政治的国家へと疎外され、それに照応して価値が正義へと疎外されるのであり、〈ブルジョア的的政治的国家体系・ブルジョア法体系〉においては、社会は資本主義的生産様式に支配され、社会の、市民社会と政治的国家との分離・二重化が徹底して成し遂げられ、一切の諸価値が商品の価値へと集約され、正義はその純然たる

疎外態として現われるからである。それゆえ、求められるべきものはその根源的批判、その止揚であって、何らかのその実現ではない。さらに言えば、マルクスがいわゆる「ゴータ綱領批判」で鋭く指摘したように、「資本主義社会から生れたばかりの共産主義社会」はブルジョアの制約から自由ではなく、それに対応して国家＝過渡期の国家もまたブルジョアの性格をまぬかれない。そもそもいかに革命的な国家であれ、国家が必要であるかぎり、その国家はブルジョアの性質を契機とする。それゆえ、革命的国家においても、そこにおける正義は、商品の価値を止揚する価値の運動を基底にもつ場合でさえも、その疎外態であるほかはないのである。正義の戦争というものには確かにありうる（かつてのアメリカ帝国主義に対するヴェトナムの党・国家・人民による民族解放の革命戦争がそうであった）。だが、正義の戦争であると認められるというまさにその点に、その限界もまた刻印されているのだ。以上から言えば、アダム・スミスの『道徳感情論』、ジャン・ジャック・ルソーの思想、カントの哲学をあらためて批判的に総括し、その上で、今日の諸々の正義論（ロールズその他）への批判が根源的に遂行されなければならないということになる。

134) MEGA, II/5, S.108-109.

135) MEGA, II/4-2, S.849.

136) MEGA, II/4-2, S.851.

137) 『資本論』第三部草稿（1863-1865年）第5章から利子生み資本の根本的概念規定についていくつか引いておく（MEGA, II/4-2より）。

「利子生み資本において、資本関係はそのもつとも外面的でもつとも物神的な形態に達する。ここでは、われわれは、 $G-G'$ 、より多くの貨幣を生む貨幣、自己自身を増殖する価値を、これらの極を媒介する過程なしにもつのである。」（S.461.）

「資本および利子では、資本が、利子の、自分自身の増加の、神秘的かつ自己創造的な源泉として現われている。物〔Ding〕（貨幣、商品、価値）がいまでは物〔Ding〕として資本であり、また資本はたんなる物〔Ding〕として現われ、生産過程および流通過程の総結果が、物〔Ding〕に内在する属性として現われる。〔…〕利子生み資本では、この自動的な物神、自分自身を増殖する価値、貨幣をもたらず（生む）貨幣が完成されているのであって、それはこの形態ではもはやその発生の痕跡を少しも帯びてはいないのである。社会的関係が、物の〔Ding〕（貨幣の）それ自身にたいする関係として完成されているのである。／貨幣の資本への現実の転化に代って、ここではただ、この転化の無内容な形態だけが現われている。」（S.461-462.）

「ここ〔利子生み資本形態〕では、資本の物神的な姿態と資本物神の観念とが完成している。われわれが $G-G'$ でもつのは、資本の無概念的な形態であり、最高の力能〔Potenz〕における、生産諸関係の転倒および物象化〔Versachlichung〕である。」（S.462.）

ところで、利子生み資本は、一定額の貨幣資本（Geldkapital）は機能資本に転化すれば利潤を生み出しうるということをまったく新たな使用価値として擬似商品化し（資本の商品化）、その価格が利子として観念されたものであって、それゆえ、この「商品」の使用価値、すなわち「利潤を生むことができる」という商品の〈体〉は本来の商品の使用価値、あくまで物的な、自然に支えられたものからは完全に切り離された〈体〉ならぬ〈体〉である。つまり、価値自体のもつ利潤を生むという性質、そのまったく抽象的で純粋に社会的な属性を使用価値とするのだから、〈体〉がありうるはずがないのである。

138) 今日の資本主義を分析する際に、架空資本の発展を二つの段階に分けて捉えることが重要である。第一は19世紀末から20世紀初頭にかけての資本主義の帝国主義段階への移行と並行した株式証券や国債などの第一次的証券化「商品」の登場とその一般化であり、第二は1970年代以降のデリヴァティブ等の第二次証券化（証券の再証券化）の進展である。前者があくまで架空資本でありながら、現実資本との関連を観念させているのに対して、後者は架空資本の上に作り出された架空資本であり、それゆえ現実資本との関連を完全に喪失した、累乗化された架空資本である。だが、これに関する分析については、その端緒となる次の論文を見られたい。崎山「物象化と知識〔運用〕資本主義下におけるわれわれの課題」、『環境思想・教育研究』第6号、pp.101-109., 2013年。しかし問題の根幹に関する追究と分析とは本稿の範囲外にあり、先に述べた如く、別稿で取り組みたい。

139) 利子生み資本の形態をとって運動する架空資本の概念は、今日の資本主義的生産様式を理解する上で

もっとも重要な概念であるが、これについては本稿では本格的な議論をすることはできない。これについてはこれにつづく論稿で取り上げたい。ただここでは次の一点だけを指摘しておきたい。『資本論』第三部の草稿の第5章でマルクスは、〈利子生み資本 - 架空資本〉について突っ込んだ議論を展開し、当時の歴史段階にあって最大限の分析を行ない、最高の業績を残したが、そこで鍵概念となるのは〈monied Capital (moneyed Capital)〉という概念である。これは当時イギリスの金融関係者が自らの業務に関して用いていたいわゆる業界用語を、経済学批判体系の中の重要な概念として練り上げたもので、資本形態の一形態である貨幣資本（生産資本、商品資本に対するものとしての）と区別して、利子生み資本形態をとる貨幣資本を指すものとしてこの用語を措定したのである。だが、エンゲルスが『資本論』第3巻を編集したとき、これをほとんどすべて Geldkapital に変えてしまったのであり、そのためにマルクスの批判が大きく損なわれることになった。1980年代前半に、この事実をマルクスの草稿自体にあたって詳細に分析・検証したのが大谷禎之介である。われわれは大谷のこの先駆的業績を高く評価するとともに、大谷が明らかにした成果をふまえて、より深化し進展した究明をおこなうつもりである。

- 140) 劇作家別役実が今日の〈ことば〉の世界が抱える種々の問題を指摘し考察を加えてきたその営為に学ぶべきことは多い。以下、取り上げるのは『日本経済新聞』2013年8月18日付「台詞と科白」と題する文章である。別役は、「『台詞』は言葉だけのものを言い、『科白』はそれに仕草が加わったものを言う」として、俳優が舞台上「せりふ」を自らの身振り・仕草とうまく一体化してしゃべることができたとき、「せりふは、一度身体をくぐらせてきたもののように、手触りのあるものに変質している。つまり『台詞』は『科白』に変わったのだ」とし、「何故今ごろ、演劇においては古くからある、こうした教訓を持ち出さなければならぬかと言うと、ほかでもない、今日我々の周辺を飛び交う言葉が、次第に『科白』のニュアンスを失い、『台詞』でしかないものになりつつある気がするからである」と指摘したうえで、次のような〈警告〉を発している。「言うまでもなく要は、言葉を単なる意味のある記号として、相手に発信するのではなく、質感のある物として、相手と共有し、共鳴しようとする感覚を持つことである」、と。ここで別役は、今日の言葉が「科白」ならぬ「台詞」になりつつある現実を言葉が記号化することとして捉えている。つまり、言葉に対する個人的な姿勢といった問題としてではなく、今日、言葉が全体的に単なる記号として浮遊している現実を指摘しているわけだ。別役が取り出し批評したこの問題は、われわれにとってはまさしく、商品語の〈場〉による人間語の世界に対する侵食・包摂ということであり、それに人間語の世界はどのように対抗するのかという問題である。この課題に応えるために、今日の言葉に現われた現実を分析し批判することに、本稿に引き続いて取り組みたいと考えているが、一時期大いに流行した記号論との関係で、一言しておきたい。

言語を記号と見る考え方はそれ程古くからある訳ではない。ジョン・ロックの先駆的な仕事（『人間知性論』1689年）についてはここでおくとして、今日的な〈言語＝記号〉論に繋がる議論は、およそ19世紀後半～19世紀末に始まると見て良い。この場合、二つの流れを区分し得る。一つは、数学という独特な一つの言語体系の成熟に根ざすもので、記号——この場合ほとんどすべてが数学の言葉である数、文字、式等々である——を実体的な単なる操作対象、もしくははそのための手段・道具とみなす立場の記号論であって、この意味で、客観主義的記号論と言うべきものである。記号論理学や情報理論、計算機科学をはじめ、数理経済学、数理科学としての生物学、今日の脳諸科学に至る種々様々の数理諸科学に広がっている潮流である。ここでは、G・ブールを先駆者として、G・フレーゲ、B・ラッセル、J・L・フォン・ノイマン、A・チューリング、C・シャノンといった名前を挙げることができる。いま一つの流れは、学としての言語学の発展に根ざすものであって、言語そのものを記号、しかも言語を記号の中心だと考える記号論である。ここでは、〈言語＝記号〉は価値や心的・精神的なものに結び付けて捉えられる。その意味で、先の客観主義的記号論に対して主観主義的記号論と呼ぶべきものであり、F・d・ソシュールに始まり、R・ヤコブソン、そしてC・レヴィ＝ストロース、ジャック・ラカン、ミシェル・フーコー等の広義の構造主義者たち、更にいわれるポスト構造主義者たち——ロラン・バルト、ジャック・デリダ、ジャン・ボードリヤール、ジル・ドゥルーズ、フェリックス・ガタリ等々——へと繋がる流れである。もちろん、これら二つの流れに分類し難いものも当然ながら存在する。例えば、C・S・パース、そしてパースを継承したと言って良いウンベルト・エーコがその例として挙げられよう。しかし、エーコの独特な位置を考えると、記号論状況に合流するものとしては、先述した二つに学的潮流を括ることができるだろう。

このような状況の現出を支える物質的基盤には、20世紀中頃からの世界資本主義の新しい発展過程があり、それを背景とした記号論の隆盛があった。記号に関する膨大な研究・言説が積み重ねられ、記号論を用いた社会分析、社会批評、また様々な文化批評等がきわめて精力的に試みられてきた。これと同時並行的に、記号を操作主義的に扱う“数学化”が、コンピュータに関する技術の急速な発展とコンピュータ自体の著しい普及、その大々的な活用に支えられて、数理諸科学にとどまらないで社会のあらゆる分野・場面に急速に浸透した。つまり、文化思想状況的には第二の潮流の下への第一の潮流の統合・併呑が、また内実としては、数学化・形式化が、にわかに、広範囲にわたって進行したのである。こうした事態は、個々の・あれこれの特定の言葉だけでなく、言語が総体として記号化することによってもたらされたものであり、〈言語・概念〉系の世界が〈記号・意味〉系の世界へと転変したことを示している。本来、言語の記号化はある限定された〈場〉、特定の諸条件の下で生じる。言語によって表わされた概念が、限定された〈場〉の諸条件によって特定の意味に〈縮退〉し、そこでは言葉は記号となり、その意味は鮮明化・先鋭化する。それゆえ、個々の記号が表わす意味は、その特定の〈場〉の運動によって明確に規定されている。しかし、個々の言葉だけでなく、言語総体が概念から剥がれ記号化するということは、諸々の言葉が特定の〈場〉なしに、意味の茫漠たる空間へと放り出され、彷徨うことである。概念の特定の意味への〈縮退〉ではなく茫漠たる意味への〈拡散〉が生じる。諸々の意味の束は単なる差異の束となり、〈差異の戯れ〉となる。つまりより突っ込んで言えば次のことだ。言語の記号化が個々の・特定の場面に依拠して生じている限り、特定の意味〈場〉が形成されるだけであり、その限定された意味〈場〉における意味行為の主体——誰・何にとつての意味であるか——は特定され、またその〈場〉で働く意味作用も限定される。ところで、言語世界の生きた運動は概念のうちにあり、概念の運動の一定の反射が、かの特定の意味〈場〉を支えたとともにそれを捉え、意味・意味作用等にもある幅と揺らぎをもたらす。しかしそうした幅と揺らぎはつねに概念の運動に支えられており、特定の意味・意味作用では済まない事態になれば、つまり特定の言語の記号化によって生じた特定の意味〈場〉、そして意味行為の主体が危機に陥れば、言語世界の運動は概念へと立ち戻ることになる。しかし、言語が総体として記号化すると、こうした言語世界の自律的運動は阻害され、成り立たなくなる。特定の意味〈場〉は形成されず、したがって意味行為の主体——誰・何にとつての意味か——は特定されず、意味・意味作用もまた限定されない。言語世界は概念から剥がれ、対象世界（・自然・社会）との絆は切断され、いわば宙に浮く。ここであらためて意味にまつわる諸問題がそのものとして、一般的な形で、しかも切実な形で問われることになる。言語が総体として記号化することによって、個々の言葉、言葉群は種々様々の意味の単なる算術的総和体と化す。つまり言語世界はいわば「辞書」的世界と化す。だが明らかなことだが、生きた言語世界は決して「辞書」的世界には還元されない。言語が総体として記号化していない限り、言語は概念をもち、それらの概念は種々の意味の算術的な総和では断じてない。それは過去の歴史の総体を総括し、かつ〈未来〉を孕む。概念はあらゆる意味の算術和ではなく積分体である。しかも概念は運動するものであるから、その積分もきわめて独特な積分でなければならぬ。比喩に比喩を重ねることになるが、非可算無限世界に直接に立脚したルベグ積分の如きものである。ところが今や、言語はこの概念から剥離し、言葉は諸々の意味の単なる算術的総和体と成り果てている。〈意味〉への問いはもはや概念によって支えられ、保障されることがない。浮遊し、漂流する〈意味〉への、果てることの無い、いささか強迫神経症的な希求、探索、追求が生じる。何事も意味を問うことなしには済まない。こうして、諸々の意味の〈差異の戯れ〉が生じる。様々の病理現象は不可避である。そして、同時並行的に急速に進行したいわゆる〈数学化〉は不可避にこうした事態を加速した。

この現実こそ、商品語の〈場〉による人間語の世界への包圍・侵食・包摂・食い破りであるが、《商品〈場〉・商品語の〈場〉》の運動に無自覚である限り、〈敵〉を見定めることのできない・困難で往々にして空しい抵抗が行なわれることになった。〈意味〉に回収されない〈私〉や〈意味〉への抗い等が高唱され、身振りや身体言語への過剰な思い入れがなされることになったのである。ジュリア・クリステヴァの、意味・意味作用を超えた意味生成（意味産出）という実践、すなわち“詩的言語の革命”（『セメイオチケ』1969年、『詩的言語の革命』1974年）、フェリックス・ガタリの、構造主義・ラカン派構造主義への批判としての、やはり意味作用に対する意味実践としての“分子革命”（『分子革命』1977年）、意味に囚われぬように「シラケつつノリ、ノリつつシラケる」という浅田彰の“逃走論”（浅田彰『構造と力——記号

論を超えて』勁草書房、1983年)、「意味の壁」にせめて穴を穿とうという大澤真幸の意味実践(大澤真幸『意味と他者性』勁草書房、1994年)、「〈意味〉への抗い」と称して具体的身体性—〈香具師的なるもの〉への回帰を提唱する北田暁大の議論(『広告都市・東京——その誕生と死』廣濟堂出版、2002年、『〈意味〉への抗い——メディアーションの文化政治学』せりか書房、2004年)、等々をわれわれは目にすることになった。こうしたカッコ付きの「抵抗」や「闘い」とは別に、いわゆるポストモダン状況それ自体を見究めようとする試みがなされなかったわけではない。だがそれらも、《商品〈場〉-商品語の〈場〉》の運動に自覚的でないことによってそれに包摂されざるを得ない。ところでだが、20世紀末から事態は今一層の転変の過程を辿っているように思われる。記号論は凋落し、意味への「闘い」は無効化した。《商品〈場〉—商品語の〈場〉》と人間語の世界との新たな関係・緊張・闘いの〈場〉がみ出されているのである。こうした〈場〉の新たな在り様が一体何であるのかを探り分析することが、今日の理論における緊要の課題である。

(いのうえ・やすし 京都精華大学非常勤講師)
(さきやま・まさき 本学文学部国際文化学域教授)

